
本格派魔法学園！！ファトシュレーション～ぱーと2～

新城寺ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本格派魔法学園！！ファトシユレーンくぱーと2

【Nコード】

N9595B

【作者名】

新城寺ハヤト

【あらすじ】

セシルは実力派主義な魔法学校に通う生徒。実家が貧乏なため家にお金を入れるために高等魔法の習得に励むが、入学して数年経ってもなかなか高等魔法を教えてくれないので魔法学校を辞めようかと考えていた。そんな矢先に事件が起きた。魔法学校の近くで謎のエネルギーを感知したのだ。学校の近辺ではみたこともない魔物達で溢れ、学校もまたその魔の手に落ちたが、そこは実力派主義の魔法学校。持ち前の実力で勝利を収めていった。数々の事件を解決しながら高等魔法を懸けた試験を受けたセシルだったが、圧倒的な力

の差に惨敗してしまうものの、正式に友人達とパーティを結成して賢者への道を歩むことを決めた。

第1話〜最高の仲間達〜（前書き）

ついに出了したファトシュレーン物語の第2弾！

前作の読者数（アクセス数）がよかったので第2弾を執筆する運びとなりました。これもひとえに読んでくださった皆様のおかげだと思っています。

内容は普通に前作の続きです。ある日突然現れた謎の魔物達の統率者が発覚！？新たな敵に学校側の対応は！？はたまたセル達パーティはどうなるのか！？

ではではファトシュレーンの第2弾、始まるよー！！

第1話 最高の仲間達

はあ。

授業終了のチャイムが鳴り、僕はだらしなく机に突っ伏す。

ハッ。

いけないいけない、こんなところで寝ちゃうなんて。

貴重な昼休みをどうして寝て過ごすなんてことができようか。

危うく閉じるところだった目をしっかりと見開き、僕は教科書とノートを机にしまう。

「なあ、どうでもいいけどさ…」

上からそれこそどうでもいいような声が聞こえた。

「目をそんなに見開いてしまうものなのか？教科書って…」

僕に声をかけてきたのは級友のウエスリーだ。

「いや、ちよつと眠くつてさ…」

僕は苦笑しながら椅子に座ったまま彼の顔を見上げる。

「ここ最近ずっとそう言っているよなお前。徹夜しなきゃならないほど急ぐテストとかあったっけ？」

ウエスリーは軽く首を傾げる。

「そういうわけじゃないんだ。別に勉強で徹夜をしているわけじゃないんだよ」

「ふーん、徹夜で勉強しているわけでもないのに眠いなんて、流石の飛び級生君も少しだれてきたというところかな？」

ウエスリーはからかうように笑った。

僕が何とも言えない顔をしていると、いつものようにお昼の念話コールが入ってくる。

『セツシル！早く食堂に来なさいよ！食堂の席が埋まっちゃうよ！』

「はいはい、すぐに行くよ」

適当にあしらい念話を切る。

「いつもの昼食コールか？」

「そう」

「いいなあ。俺も女の子に昼食一緒に食べませんかなんて言われてみたいものだぜ」

ウエスリーの独り言に軽く微笑し、僕は席を立った。

僕の名前はセシル。

ここ、ファトシユレーン魔法学校に通うごく普通の十六歳だ。

僕達の世界には魔法という古来よりずっと伝わっている力がある。ただし、この力は魔力がある一定以上の者でないと扱えず、さらに魔力があっても、術を行使するための力、イコール魔法力がないとだめなのだ。

一口に魔法と言っても様々なカテゴリーに分けることができる。物を持ち上げたり火を放ったり、怪我を治したり……。そして、僕はそんな魔法の力を使いこなし世のため人のために働く魔法使い達の頂点、賢者になるためにここに通っているというわけだ。

まあ、僕の場合はそれ以外にも理由があるのだが、今を生きる大抵の魔法使い達も世のため人のために働くことを本気で所望している人達ばかりではない。簡単に言うステータスということだ。

資格を持っていれば、それだけ職に就いたりする時に有利になったり何かと都合がよいというわけだ。

動機が希薄だと思いかもしれないけど、それが今の生き方である。話がずれてきているので元に戻そう。

僕の家庭は父親が仕事で失敗して、そのまま蒸発。稼ぎ手のいな

くなつた家族の代わりに僕が魔法を学びながらバイトをして、故郷に仕送りをしているのだ。

何で素直に働かないのか？

そのわけは、同時に僕がここに入学した理由にもなる。

『魔法は使い方によっては金になる。賢者になれば一晩で金貨百枚も夢じゃない』

この二言がファトシュレーンに入学するきっかけ。

地道に稼いでも金貨百枚なんて何年かかるかわからない。それなら、飛び級をしてすぐに賢者になれば、ここ数年のうちに家族を裕福にして上げられる。

僕は、母親と妹にこのことを話して、なけなしの貯金を僕の入学費に当てた。

それから三年、僕は天魔導師という賢者の一歩手前の位までのし上がっていた。しかし、すぐに賢者になれると思つたのが大間違い。賢者になるには、今までの昇級試験で行われたような筆記試験と高等魔術の習得が条件となつていたので。僕はすぐさま、高等魔術の習得を教師達にせがんだが、拒まれ続けた。

あまりにもひどい拒まれ方をしたせいで一時は学校を辞めようかと考えた。だが、とある出来事が起きて、高等魔術を賭けた実戦テストを受けることになった。

相手は数年前にファトシュレーンを首席卒業したグラッツ先生とセリ力先生。

もちろん敵うはずがなかったけど、高等魔術の習得に多大な魔法力が必要だということを知つた僕は、友人達の好意で正式にパーティを組み、レベルアップに勤しんでいるというわけだ。

「どうでもいいんだけどお……」

僕を下からじつとりとした目で睨む女の子が一人…。

「おっそいじゃない！もう、あたしお腹ぺっこぺこなんだからね。お腹と背中がくっついたらあんだのせいだかね！」

今、僕に食って掛かっている女の子はマリノちゃんといって、僕と同じ時期に入学した同期仲間だ。

「マリノ、お腹空いているからってそんなに当たっちゃ駄目だよ」横でマリノちゃんをなだめているのが、ノエルちゃん。マリノちゃんの良きパートナー的存在で、街のお菓子屋さんが実家である。

その横でちょこんと可愛らしく座っているのが僕と同じく飛び級でファトシュレーンにやってきたリプルちゃんだ。一応十三歳なんだけど、見た目と中身はどうみても十歳程度にしか思えない。

「ねえねえ、早く並ぼうよ。中庭で遊ぶ時間がなくなっちゃうよお」
「そう焦るなりプル。時間はまだたっぷりあるのだ」

そう言ってリプルちゃんの頭をポンポンと優しく叩いているのは少し前に編入してきたばかりのギルバートだ。見た目はどう見てもどこかの軍隊に所属していたのではないかというくらいの恐持てだが、意外と優しいところもあって、特にリプルちゃんのような子供の面倒見がよい。

「……セシル、今我輩のことを保母さんみたいだと思っていだろう？」

ついでに意外と鋭い。

「皆、待たせてごめんね。さあ、ご飯にしよう」

これが僕の親愛なる友人達。

そして、最高の仲間達

第2話〜決意〜

昼食を食べ終え、マリノちゃんも満足したところで僕達は学生食堂を後にした。

「あ、購買に寄っていくから皆は先に帰ってて」

教室に戻る途中でノエルちゃんが遠慮がちにそう言った。

「あたしも行くよ。食後のアイスを買に行きたいし」

「わーい、私もアイス食べるー！」

「お前達、食事をした後だというに…」

マリノちゃんとリプルちゃんのやり取りを見てギルバートが呆れたように息を吐く。

結局、皆で購買に行くことになった。

昼休みも終わりに近づいているためか、人はあまりいない。

「いらつしやいませ」

そういえば、ここの売り子の女の子ともご無沙汰だった気がする。最近、魔物の事件や試験で忙しくて昼食をろくにとる暇がなかった。

ノエルちゃんは文房具売り場に行き、マリノちゃんとリプルちゃんはアイス売り場に行く。ギルバートもだいぶここの勉強にも慣れてきたのか参考書を見て回っている。

（僕はどうしようかな…）

一緒に購買にきたものの特にすることがないのは僕だけのようだ。

「あの、セシルさん？」

不意に後ろから声をかけられた。

僕の後ろには、カウンター越しに売り子の女の子が立っていた。

「やっぱりセシルさんでしたね。最近すっかり購買に来なくなったので心配していましたよ。食いつぶれていないか」

笑いながら冗談を言う女の子に僕は苦笑した。やっぱり三年間いっつもここにある、ある物を買いに来ていただけに顔はすっかり覚え

られているようだ。

「安いがうまいパン、まだあります？」

僕は女の子の反応を確認するように聞いてみる。

「今日はもう売り切れですよ」

女の子は微笑しながら言う。

僕も思わず笑ってしまった。

「美味しいんですね、安いがうまいパン」

「ええ。お腹に十分溜まるのに銅貨三枚ですむのは非常にありがたいですよ」

僕はそう言ってまた微笑する。

「セシル君、エリスちゃんと知り合いだったの？」

ノエルちゃんがノートを二冊手に持ちながら聞く。

「いや、今日が初めて……」

「そんなことはないですよ。いつも安いがうまいパンを買ってくれる常連さんです」

エリスさんは僕の言葉を遮り、屈託のない顔で微笑む。

その後、ノエルちゃん、マリノちゃんリプルちゃんの順に会計を済ませた。

ギルバートは参考書を諦めたようである。

「ところで、皆さん宛にお荷物が届いているのですが……」

「え？」

「僕達全員にですか？」

僕の問いにエリスさんは小さく頷いた。

「グラッツ先生からなんですけど、私一人じゃ少し重いのでセシルさんとギルバートさんにお手伝いしてほしいのですが……」

特に断る理由はないので、僕とギルバートはエリスさんの後について、倉庫から荷物を運び出す。そうして置かれた六つの包みは、どれも大きさが違った。

包みには魔法文字で僕達の名前が書いてあった。

「ご自分のお名前の物を受け取るように、とのことですよ」

一応、エリスさんが説明する。

僕の包みは長めで、少し重い。

「何かギルバートとセシルの包みはやけに大きいね？」

マリノちゃんが物欲しそうな目で見ながら言う。そう言うマリノちゃんの包みは僕と同じ細長だが、長さや重さがぜんぜん違った。

まさか、これって…。

「これは素晴らしい!!」

僕が中身におおよその見当をつけ始めたとき、ギルバートが感嘆の声をあげた。

何がすごいのかと思ってみてみたら……。

そこにはこれぞ軍人魂と言わんばかりにギルバートが黒く艶のある銃を振り回していました。中に入っていたのはやっぱり僕達が普段愛用している……。

「……ってギルバート!？」

「おお、セシル! 見るがいい、この艶と銃身を! これは、一昔前に戦争で使われたハルバードと呼ばれる銃である! こんなところでこれを手に取るとは……。我輩、感無量である!」

ギルバートはそう言って、ますます銃を振り回す。

「わわ、ギルバート! よしなつてば!」

「ギルちゃん、駄目だよお!」

リプルちゃんの必死の制止も今は寝耳に水。

購買にいた数人の生徒達も悲鳴をあげている。

「ギルバート、落ち着け! あんまり騒ぎを大きくするな!」

「ガハハハ! 皆、我輩にひれ伏すがよい!」

ああ、やばいなあ。あんまり騒ぎ立てて、先生達に見つかりでもしたら僕らまでとばっちりを食らう羽目になるぞ。

「ギルバート、落ち着いてくれよお!」

「こらー! 何事だ!」

ほら、来ちゃったじゃないか!

マリノちゃんやノエルちゃんもその声に顔を真っ青にしている。

しかし、来たのは僕達の予想に反して先生達ではなく、ファトシュレーンの若き警備員フレッドさんだった。

「おお、フレッドではないか！見よ、この美しきフォルムを！これは……」

「のわわ、ギルバート！？は、早くその銃をしまえー！」

さすがのフレッドさんもギルバートが銃を乱射しようとしているのを見るなり、びっくりして腰を抜かしてしまった。

「なぜである！？我輩のこの気持ち伝わらないというのか貴様あ……」

「そ、そうじゃないだろうがー！」

ああ、もう……。

バチコーン！！

「……………」

僕の放った雷の拳を背中に受け、ギルバートは無言のまま床に倒れた。

ようやく平和が戻った購買にエリスさんが必死に謝りながらフレッドにことの経緯を説明した。

「まあ、事情はわかったけどさ、それなら次回からは放課後に人気のないところで呼び出すとかにしてくれよ。一瞬、また魔物に襲撃されたのかと冷や冷やしたじゃないか」

「本当にすみませんー」

「気をつけてくれよ。じゃ、俺は仕事に戻るから」

「あ、実はフレッドさんにもグラッツ先生から預かっているお荷物があるんです」

エリスさんはそう言うと、カウンターの上の細長い包みを彼に手渡す。

「フレッドさん、きっとこれは僕達が普段戦闘で使っている武器が入っていると思います」

「……そうっばいな。俺のは手紙がついていたぜ」

「そっうえばあんだのにも手紙みたいのが挟まっていたんじゃない

？」

マリノちゃんがそう言っただけの包みに挟んであった手紙を手渡した。

「なんて書いてあるの？」

リプルちゃんが興味津々な顔で手紙の封を開ける僕を見ている。

「ええと、『この間はご苦勞様。突然の試験だったにもかかわらず君達の動きは予想以上によかった。俺が試験官なら迷うことなく合格……としてやりたかったが、こればかりはしょうがないことだ。だが、人はどんなことでも一人のときよりも多人数で協力し合ったほうが成長の度合いが高い。だから、今回の結果にめげずにお前が共に歩むと決めた仲間達とさらなる精進を目指して欲しい。その助けになるかはわからないが、心ばかりの品を贈ろう。教師が生徒に贈ってやるべきものではないと思うが、決して無駄にはならないと思う。有効に利用してくれ』グラッツより」

「じゃあ、やつぱりこれは……」

「私達が普段戦闘で使用している武器？」

マリノちゃんとノエルちゃんは改めて自分が手にしている包みを見下ろした。

（グラッツ先生、ありがとうございます。先生の贈り物は、決して無駄にはしません）

僕は包みを抱えながら、絶対に賢者になってやると心に誓った。

第3話 集え若人！骨折損のくたびれ損！？ 前編

グラッツ先生から贈られた武器を持って今日も僕はコロシウムに向かう。

ファトシュレーンは実力主義の魔法学校なので、授業の一環として擬似魔物や対人戦を行っている。もちろん、ギルバートのような戦士養成学校とは違うから戦闘といってもかなり限定されたルールの範囲での戦闘になる。今までは……。

一ヶ月前、レアードの街を、ファトシュレーンを突然襲った謎の魔物達。生徒会の人達の調べで近くの丘が魔物の発生地だということはわかったのだが、どうやって出現しているのかはわからず、現在も調査中である。そのため、ファトシュレーンの教育方針が少しずつ変わりつつあった。魔物が初めてファトシュレーンを襲った日、ほとんどの生徒達が何もできなかったことを指摘したドクターエックスは、模擬戦闘のカリキュラムの見直しと強化を提案。今では、全ての階級で模擬戦闘の授業が行われている。そして、一部では筭以外の武器の使用も認められている。というのも、ドクターエックスが異常に魔物を強くしすぎたため、魔法だけで倒すのは無理だという指摘が指導教員から上がったためである。そのため、主に上級魔術士クラスの戦闘訓練から武器の自由化が認められている。

まあ、どのクラスでもそれを守らない生徒は若干いるらしいが。話が少し学校全体のことになってしまったが、これから僕がコロシウムに行くのは授業だからじゃない。現に時刻は四時を回っており、とっくに放課後の時間帯だ。

なぜ、そんな時間にコロシウムに行くのかというと、前にも話したとおり僕は一週間ほど前に高等魔術の習得を巡ってグラッツ先生達と対立することになった。その時に魔法力の強化には実戦が一番だというアドバイスをもらったため、ドクターエックスに無理を言うてお願いをして——本人はものすごく嬉しそうだったが——彼の

魔物の実験台となり、自由戦闘を行わせてもらうことになったのだ。もちろん、授業ではないのでメンバーはマリノちゃんやノエルちゃんといった僕が普段付き合っているメンバー達だ。

最初は彼女達を巻き込みたくなくて、パーティに参加することを拒否したんだけど彼女達にもそれぞれ持っている目標があり、そのために参加するだけだという言い分で結局パーティへの参加を承諾したというわけだ。

コロシアムに入ると、既にいつものメンバーが闘技場の中央で待機していた。もちろん、その中にドクターエックスもいる。

「ようやく来たか。皆、お待ちじゃぞ？」

「すみません。掃除当番に引つかかっていたもので」

「そうだったんだ。お疲れ様」

ノエルちゃんがねぎらいの言葉をかけてくれる。

「さて、今日の特訓じゃが、今日は課外授業とする」

『課外授業？』

全員がドクターエックスの言葉をオウム返しに繰り返した。

「エスカルの森へ行く。たまにはここの魔物以外のタイプとも戦っておいたほうが気晴らしになってよいじゃろう？」

どういう気遣いなんだろうと、僕を含む数人が思う。

ただ約一名を除いて。

「フハハハ！早くこの銃の試し撃ちがしたいー！！早速そのエスカルの森とやらに行くぞ！」

聞えれば何でもいいのかお前は…。

僕を含む全員がそんな目をした。

「わかりました。行きましょう」

断る理由なんかないので僕もドクターエックスの特訓メニューに賛成する。この時からなんかマリノちゃん達女の子の反応が鈍いような気がしたんだけど気のせいかな。

エスカルの森はリードからほんの二、三キロほど北北東に進んだところにある小さな森だ。湿度が高く、普通の森にいるような獣

系の魔物よりも沼地に住んでいるような魔物のほうが多いのが特徴だ。

「でも、どうして急にエスカルの森に行こうなんて言い出したんです？」

僕がずっと思っていた疑問をぶつける。

「実は、わしの研究室がそろそろ魔物達でいっぱいになりそうなんじゃよ。というか、むしろいっぱいなんじゃ。魔物研究をすることがわしの専門じゃから特に困りはせんのだが、何度か脱走者を生徒会の奴らに抑えてもらったことがあったんじゃ」

「ええ！危ないなあ……」

マリノちゃんが驚きの表情で言う。

「わしが極秘裏に作っている魔物専用の保管所も二つほど満杯になってしまっている。流石にこれ以上、勝手に保管所を作れば学校側も黙ってはおるまいし、どうしようかと悩んでおったんじゃ」

「それと、この課外授業とどう関係があるんですか？」

「つまりじゃ、学校側にばれないようにすこし遠くに、なおかつわしの目が行き届く範囲の場所に保管所を作ろうというわけじゃ」

「何それー！それって、自分の目的のためにあたし達を利用していいんじゃないの！」

マリノちゃんが肩をいかせて怒るが、ドクターエックスは平然とした顔で「そうじゃよ」と自慢の顎鬚をなでる。

「お主らもここいらの魔物を相手に経験を積めて一石二鳥ではないか」

ドクターエックスはそう言って愉快そうに笑う。

多分、マリノちゃんが心配しているのはその先のことだと思うんだけど。

ファトシュレーンの生徒は意外とレアードの街近辺の情報に疎い。

戦闘訓練もあるのに意外だと思うかもしれないが、その理由を作っているのがこのドクターエックスだったりする。

基本的に、ファトシュレーンの戦闘実習は彼の改造した魔物を相手にすることになるからだ。

今回のような課外実習なんて基本的にまったくなく、たまに遠足とかで出かけて大怪我をして帰ってくる生徒もザラではない。

彼らの大半は魔物から逃げている途中で転んで足の骨を折ったとかそういうのだけだね。

そういうわけで意外と皆、リードの周辺の地理は把握していない。

僕もエスカルの森に来るのは半年前の遠足のとき以来になる。

「ふええ、何かじめじめするう〜」

エスカルの森が初めてのリプルちゃんが気持ち悪そうに言う。

参考のために言うておくと、エスカルの森の湿度は半端なく高い。それこそ、夏場なら少し歩いただけで汗だくになってしまっただ。

「私も何度来てもこの森の感じは慣れないなあ…」

ノエルちゃんもため息混じりにつぶやく。

「ほれ、ぶつくさ言っていないでもっとしゃきしゃき歩かんかい！」

そういうドクターエックスの表情は森に入る前と比べて晴れやかである。大方、ここに生息しているエスカルもこの人の餌食になるんだろうな。

「む、来たぞ！！」

気配を察知したギルバートが持ってきた銃を構える。

ああ、地獄のときがとうとう来たか。

まさかこんなに早く出てくるなんて思わなかったなあ。しかも、ずいぶんとまた他の仲間を連れて大群で。

「ほれほれ、さっさと倒しにいかんかい」

ドクターエックスは楽しそうである。

（まるで、狩りでしとめた獲物を横取りする獣みたいだよ）

とはいえ、倒さないとこっちがやられるから戦うしかない。

はあ、帰ったら念入りに洗濯しないと…。

そんなことを思いながら僕はグッツ先生がプレゼントしてくれた新しい剣を構える。

エスカル動きは実に簡単で、自分達の近くにいる者に対して体当たりしかしてこない。そのなけなしの体当たりも僕達とは身長さがあきすぎる故にほとんどが、膝の高さほどまでしか届かない。

別段驚異ではないのだが――

「ひゃあ！スカートにくつついたあ！」

「うええん、気持ち悪いよお…」

「いやゝん、こないでえ！」

マリノちゃん達はあまりの気持ち悪さにその場に逃げ惑っている。いろんな意味でこちらでも驚異である。

「なんて言っている場合じゃなかったな」

僕は素早く魔法を唱えると、いつものように剣に付加する術式を加える。

今回はナメクジ系の魔物によく効く炎の魔法だ。ただ、炎の魔法を武器に付加するときは気をつけないといけない。

鉄が炎の熱に耐えきれず溶けてしまう場合があるのだ。しかし、この剣はどうやらそんな心配はないみたいだった。

（さすがグッツ先生。僕達の得意分野をわかってくれているなあ）

僕は遠慮なく、炎をまとった剣をエスカルに向かって振り下ろす。身長があるため、かなり当てにくい、まずは一匹を撃破。

ああ、ちなみにもし剣に魔法を付加させるときにそういう状況に陥らないようにするにその魔法の耐性魔法をかけておけばよい。

「おお、素晴らしい！素晴らしいぞお！」

少し離れたところではギルバートが半狂乱状態になりながら、新しい銃を乱射している。彼は問題なさそうだな。

あと、問題なのはマリノちゃん達だな。

僕は、悪戦苦闘している女の子達のほうをむく。

マリノちゃんとノエルちゃんは武器が短剣と箒だから、切っ先

や箒の先端を使って、脚の上を這い上がってくるエスカルを落としているが、リプルちゃんだけはその可愛らしい拳自体が武器ため、触るに触れないでいる。

「いや〜ん、離れて〜!」

不必要に体をうねらすリプルちゃん。

うゝむ、これはこれで少しエロティックな感じだな。それに可愛いからあえてそのままにしてみようかとも考えた。

(いや、止めておこう)

宣言します。

僕は臆病者^{チキン}でした。

リプルちゃんの足についているエスカルをアロー系の炎魔法で落とす。間違っても彼女の足には火傷一つつけていない。

「リプルちゃん、魔法だよ魔法!」

僕が言つと、リプルちゃんも気持ち悪い原因が去って少し安心したのか炎魔法の詠唱を始める。

いったん集中力が高まるとどんなことも気にならないのがリプルちゃんの長所だ。

「エクスプロード!」

げ、その魔法は炎系の上位魔法じゃないか。

案の定、僕達の周囲でものすごい爆発音がしてあたり一面が一瞬にして茶色い焼け野原と化したのだった。

第3話 集え若人！骨折損のくたびれ損！？ 後編

「みんなあ、ごめんなさーい！」

戦闘が終わった後、彼女は目に涙をいっぱい溜めて僕達にひたすら頭を下げていた。

「いって、そんな気にしなくても。ゴホ」

「そうだよ。エスカルも一瞬で全滅できたんだし。ゴホゴホ」

女の子二人は半ば安堵したように言う。

「まあ、結果オーライというやつだが、もう少し加減してくれてもよいではないか。ウエツホゲホ！」

爆発時に起きた大量の煙を吸ってしまった僕達はしばらく咳が止まらなかった。

「ふむ、こちら辺でよいかのお」

しばらくまた森の中を歩き、ちょうど中央くらいまでやってきたところでドクターエックスがトンと持っていた杖をついた。

「こんなところまできてどうするんですか？」

「まさかここまで来て引き返せとか言わないでしょうね？」

マリノちゃんがげんなりとした顔で言う。

「今日、ここに来た目的はわしの可愛い息子達の家作りの第一工程じゃ。木々の様子や湿度の高さを調べて歩いておったのじゃが、こならまあちようどいいじゃろう」

湿度を調べながら歩いていた？

僕達にはドクターエックスは普通に歩いていたようにしか見えなかった。

（相変わらず謎が多いね）

（うん…）

ノエルちゃんにひそひそと耳打ちをする。

「聞こえとるぞ」

「あっ…」

「えと、その…」

「まあよい。とにかく今日は第一段階として敷地作りじゃ」

『敷地作り…?』

聞くだけでも力仕事になりそうな感じだな。

「まずはこの辺りの木々を切り倒し、地面をならさねばいかん。セシル、ギルバート」

ああ、やつぱり。

なんとなく呼ばれることは覚悟していたよ。

「木を切り倒せばよいのだな？」

「そゆことじゃ」

ギルバートの問いにドクターはにやりと笑って頷く。

「ただし、炎の魔法で焼いてしまつてはいかんぞ。人間の勝手な都合で焼かれてしまつては木もいたたまれないじゃろう。ちゃんと根元から切つて材木として持つて帰るのじゃ」

「ちょ、ちよつと！今日一日でそれ全部やるのお!？」

マリノちゃんが嫌な予感と言わんばかりに大声を張り上げる。

「そんなわけがあるか。お前達にやつてもらうのはほんの一角だけじゃ。それに、助っ人もちゃんと呼んでおるし」

「え、どこに？」

「今はまだ来んよ。もう少ししたら来るじゃろうから、それまではこのメンバーで頼むぞ」

『はあゝい』

僕達はけだるさ半分に、それぞれ割り当てられた作業を開始した。魔力を動力として動く魔動のこぎりを持ち、僕とギルバートはせつせと木を切り倒す作業に入る。

「はあゝ、何だつて僕達がこんなことをしなくちゃいけないんだろう」

「ばやくなセシルよ。これも、ドクターが我らのために考えてくれたことだ」

「いや絶対そんなことはないと思うんだけど…」

多分、ギルバートは銃の試し撃ちができたから満足しているんだろうなあ。

僕は魔動のこぎりを木に食い込ませながら一本ずつ慎重に木を切り倒していく。

「ギルバート、慣れてるね…」

僕よりも明らかに作業のスピードが速いギルバート。

「そうか？このような作業は前の学校ではよくやっていたからな。それにしても魔力の力を使って動く道具とは便利なものだ」

ギルバートは感心しながらも、さらに作業のスピードを上げていく。

普段、こういう仕事に慣れていない僕はこの道具の振動だけでも体力が限界なんだけどなあ。

「こんにちは」。ドクター、お手伝いに来ましたよお」

（このどこか間延びしたような声は…？）

僕は作業を中断し、声が聞こえたほうを向く。

「あれ、エリスちゃんじゃない!？」

マリノちゃんが意外な助っ人に口に手を当てて驚いている。

「あら、皆さん。どうしてここに？」

「それはこっちの台詞だよ」

「私達はドクターエックスの研究魔獣のための小屋作りに借り出されたんです」

「そうなんですか」

「向こうにはセル君とギルちゃんもいるよ」

向こうでリプルちゃんが僕達を指差しているのが見えたので、見えるかどうかはわからないが一応軽く会釈をした。

彼女は会釈を返す代わりに僕達のほうに歩み寄ってきた。

「こんにちは。お二人はそんなものを持って何をしていらっしやるんですか？」

「見てのとおり、倒木作業かな？」

「エリス殿はなぜこのようなところに一人で？」

「私はドクターエックスに呼ばれてきたんですよ。多分、皆さんのお手伝いをさせてもらうことになると思いますけど」

「そうなの？」

ドクターエックスの呼んだ助っ人がまさかエリスさんとは意外だったな。

「おお、エリス。そんなところにいたのか」

「ドクター、すみません。購買の棚卸をしていて遅くなっちゃいました」

「よいよい。それで、早速じゃが男共に混じって倒木の作業を手伝ってやってはくれんか？まだ予定の半分も終わつとらんでな」

「わかりましたあ」

エリスさんはにっこり微笑んで頷くと、そばにあった魔動のこぎりを手に取った。

「ちょ、ちよつとドクター！エリスさんは女の子ですよ！？」

「当たり前じゃろうが。どこをどうみたら、あやつが男に見える？」

「いや、そうじゃなくて女の子にあんなものを持たせたら危ないでしょう！？」

「それはどうかの？案外、お主よりもエリスのほうが器用にこなすかもしれんぞ？」

そんな無茶な、と思いつつも僕とギルバートは彼女の仕事ぶりを後ろから拝見する。

ギューーン。

何とも嫌な音を立てながら、エリスさんは器用に木の根にのこぎりの刃を入れていく。そして、あっという間に一本切り倒してしまった。

「……………」

「どうじゃ？お前よりも扱いになれたものじゃろ？」

呆けている僕にドクターエックスが当然と言わんばかりにニヤリと笑う。

「あやつは人間とドワーフのハーフじゃよ」

「!!」

「そう驚くことでもなからう。魔法を習いに来る者は特に、普通の学校と比べて種族が多様じゃ。お前にもエルフやピクシー、はたまたそれらのハーフがクラスメートにいるじゃろ?」

確かに、そういわれてみればそうだ。別段、驚くようなことではない。

「ああみえて戦闘に慣れてもいる。強力な前衛になることは間違いないぞ?」

ドクターエックスは僕の肩をポンと叩くと、整地作業の確認をするためにマリノちゃん達が作業しているほうへと歩いていった。

「……………」

「セシル、そのことは後で考える。今は、この作業を終わらせることが先決だ」

「うん、そうだね」

僕は小さく頷くと、考えるのをやめ再び倒木作業に入った。

森の開拓作業は太陽が山に隠れる少し前まで行われた。

「よし、今日のところはだいたいこんなものでよいじゃろ。後は、レアードの大工達に任せるとするか」

最初から大工に任せろよ……と突っ込みたかったのは山々だったが、相当疲労した僕達にそのことを言うだけの力を持つ者はだれもいなかった。

「さて後は……」

ドクターエックスはさもわかっていたかのように切り開かれた森の一角を杖で指す。

そこには、怒りをあらわにして佇んでいるエスカルや森の動物達。「まあ、急に住処を奪われたんじゃ。当然じゃろうなあ」

やっぱりこの人、先のことまでわかっていて僕らにこんなことをさせたのかー!

「お主らの特訓のこととも忘れずにちゃんとメニューを組んでやるわしはまさに教師の鑑じゃな」

ドクターエックスは自慢の顎鬚を撫でながら愉快そうに笑っている。

『そんなぁー!!』

マリノちゃんとノエルちゃんの悲鳴がこだまする。

はぁ、今日はため息をついてばかりだな。

襲い掛かってくる魔物を目の前にしながらため息をつく。そのうちの一匹がエリスさんに向かって突進していく。

「もう、話し合いで解決しようとしなない人は嫌いです!」

エリスさんは熊の爪攻撃を軽々とかわすと、そのまま素手で熊の頬を殴った。

「!?!」

熊が思わぬ一撃にひるむ。

武器も何もつけていないパンチなのに、あんな大きな熊をひるませるなんて。

『ああ見えて戦闘に慣れてもいる。強力な前衛になることは間違いないぞ?』

ドクターエックスの言葉が思い起こされる。

「セシル君、どうするの?」

「どうするって言われてもドクターエックスもいるし逃げるのは難しいよ」

「うむ。かわいそうだが、倒すしかあるまい。なに、貴様らの死は私の経験となり一生生きていく……」

ギルバートはわけのわからないことをつぶやく。どうせ、銃の試し撃ちができる程度にしか考えていないんだろうけど。

「とにかく倒そう。正直、早く帰りたい……」

僕は率直な感想を述べ、剣を構えた。

さっきの戦闘と違い、熊や鹿型の魔物もいたが、基本はエスカルが主体の森。

小さなエスカルは炎で倒し、そのほかの魔物は物理攻撃で倒す。

「ひゃ!?!何、このでっかいエスカル!」

マリノちゃんは自分の目の前に立ちはだかる普通のエスカルよりも何倍も大きいエスカルに炎の魔法を浴びせるが、殻にこもられて中身にはまったくダメージを与えられていない。

「多分、それはラジカルだよ。本で読んだことがあるよ!」

ナツクルをつけた腕を振り回しながらリプルちゃんが答える。

僕もその名に聞き覚えがあった。確か、その殻はどんな鉱物よりも硬く、並大抵の物理攻撃じゃ歯が立たない。それに加えて、ラジカルは酸を吐き出せるものが多いらしい。いくら魔法を付加していても酸が金属部分に触ればひとたまりもない。

(注意しなくちゃ)

僕達はまず、ラジカルは放っておいてその他の魔物達を先に片付けていった。

ドクターエックスの言ったとおり、エリスさんは接近戦に関してはかなりのやり手で彼女は拳一本で大型の魔物を中心になぎ倒していった。

「セシル、どけ!いくらあの大カタツムリとて銃弾には勝てまい!」

ギルバートは殻に向けて自慢の銃を撃つ。

カキン!

銃弾は甲高い音を立てて、そのまま斜め上空に反射して飛んでいった。

「キシヤー!」

殻から顔を出したラジカルは反撃と言わんばかりに酸の液体を周囲に吐く。

「危ない!」

「キャー!」

何とも奇妙な悲鳴をあげてエリスさんが後ろに飛び退く。

「うゝむ、これはやっぱり中身が出てきたときを狙って魔法を当てるしかないね」

僕の一言に全員が小さく頷く。

ラジカルもギルバートの攻撃を受けたせいかなかなか殻から顔

を出そうとしない。

スナイパーのようにひたすら、相手が動くのを待つ。

しばらく待ち続け、業を煮やしたのかラジカルの殻が小刻みに揺れる。そして――

『今だ！！』

僕とマリノちゃん、ノエルちゃんの三人の炎系魔法が出てきたばかりのラジカルの顔に直撃する。

「ピーー！！」

見た目の無骨さとは裏腹に甲高い悲鳴をあげながら、ラジカルは殻を残して消滅した。

「うむ、見事じゃ」

パチパチと乾いた拍手が後ろから聞こえ、ドクターエックスが賛美の言葉を贈る。

「ラジカルの殻はどうします？」

「ふむ、持って帰るとするかな。そいつを素材にしてエスカル系の魔物を作れるかもしれん」

「わかりました」

僕は頷き、ラジカルの殻の下に手を入れる。

「ん……ぐぐ、これは……重い」

一人で持てる自信はなかったけど、この重さは予想以上だ。

「どれ、我輩にも持たせろ」

ギルバートが、さっきの僕と同じように殻の下に手を入れて持ち上げようとする。

「ふおおおお！ぬうおおお！！」

ギルバートは頑張つて、彼の腰くらいの高さまで殻を持ち上げてさらに少しかだけ歩いたが、そこで力尽きてしまう」

「ドクター、これは生半可な重さではないぞ」

「そうか。ではエリス」

エリスさんは「はい」と言つて頷くと、僕達が苦戦したラジカルの殻を簡単に持ち上げた。

「力仕事なら任せてください。私にはドワーフの血も半分流れていきますので」

啞然とした顔の僕達を見ながら優しく微笑むエリスさん。

どうしてこんな人が購買なんかの店員なんてやっているのか、フ
アトシュレーンの謎だ。

第4話　幸せのカタチ　前編

キンコンカーンコン。

チャイムが鳴って一日の授業が終わる。

「やっどおわっただあゝ」

今日は楽しい楽しい金曜日。

何が楽しいって言わずともわかるであろう。幸いにも、今日はドクターエックスの都合により戦闘の特訓もない。自分から特訓を志願しておいて言うのもなんだが――いや、これは言ってもいいはずである――ドクターエックスが僕達の特訓用に戦わせる魔物は一日単位で強くなっているのです、とてもじゃないが僕達の力量が追いつかないのだ。フレッドさんがいてくれるときは前衛が一人増えるということもあつてそれほど体力の消耗が激しくはないのだが、普段のメンバーだけだととてもじゃないけど身がもたない。こちらが気を抜けば、ドクターエックスが仕込んだ魔物はいつでも僕達を殺そうとするのだから。

とてもじゃないが、そんな戦々恐々とした日々を朝と夕方に体験していれば、嫌でもこのような臨時休講の日がうれしくなるものだ。久しぶりに教会のバイトもいれたことだし、早速行くでしょう。

（二週間ほど休んでいたから神父様にもかなり迷惑をかけてしまつたし、ノエルちゃんのお店でお菓子でも買っていこうかな）

神父様は無類のお茶好きなのだ。

ノエルちゃんの実家はお菓子屋で、レアードの街の隅で細々と経営している。味は美味しいのだから、中心街に引っ越したら流行ると思うんだけどな。

ファトシュレーンを出て、中心街を通り抜け裏路地を進んでいく。普通の一軒家の一階がお店なのだ。

「こんにちは」

「いらっしゃいませ。あ、セシルさん」

店のカウンターを拭いていたラウナちゃんが嬉しそうに僕に挨拶をする。

「こんにちは、ラウナちゃん」

僕もにつこりと微笑んで挨拶を返す。

ラウナちゃんはファトシユレーンの生徒会役員に所属している僕よりも一つ年下の女の子だ。

「セシル君、また来てくれたのね」

ノエルちゃんがキッチンから顔を出す。

「今日は教会じゃなかったの？」

「今から行くところなんだ。しばらく休んじやつたし、教会の子供達にお菓子でも持っていこうかと思って」

「嬉しいな。うちのお菓子を選んでくれるなんて」

「前に食べたカステラの味が忘れられなくてさ。だから、カステラをちょうだい。あと、こっちの砂糖菓子と奥のほうのクッキーも」

『ありがとうございます』

ラウナちゃんとノエルちゃんは丁寧な頭を下げると、僕が頼んだお菓子を丁寧に箱詰めしていく。

「実家はやっぱり大変？」

何気なくそんなことを聞いてみた。

ノエルちゃんは「少しね」と小さくつぶやく。

「でも、私はこうやって家でお菓子作りをしている時が一番幸せなときなの。いつか魔法でお菓子が作れたらいいなって思うんだ」

「魔法でお菓子か。もし、できたら真つ先に僕に食べさせてくれる？」

「もちろん。私からお願ひしたいくらいだよ」

ノエルちゃんはそう言つて少しはにかんだ。

そのはにかんだ顔が僕には一瞬だけ美しく見えた。ラウナちゃんもいたから気づかれないようにすぐに視線は元に戻したけれど。

「ねえ、ノエルちゃん」

僕の問いにノエルちゃんは「なあに？」と柔らかい口調で答える。

「このお店、中心街に引越したりはしないの？」

「引越し？」

ノエルちゃんがきよとした顔をする。

「だって、これだけ美味しいお菓子屋さんなんだから中心街に引越したほうが絶対お客さんも入るし儲かるんじゃないの？」

「……確かに、そう考えたこともあった。両親にも相談したわ。でも、お店を始めたときの借金がまだ残っているし、その上私がファトシュレーンに入学しちゃったものだから人手もお金も不足しちゃっているの」

「……………」

「少し考えたらわかることなのにね。魔法学校なんかに行っている暇があったら家の手伝いをしたほうがいいことくらい。でも、このお店に来た魔法使いの人に魔法の素質を見出されて、どうしても自分を試したくなったの。だから、無理を言ってファトシュレーンに入ったの。私、早く賢者になって魔法の力でこのお店を守ってきたいんだ」

「そっか。ノエルちゃん、頑張って！僕もできる限りのことをするよ！」

「ありがとうセシル君」

代金を払い、ノエルちゃんとラウナちゃんに別れを告げて僕は少し急ぎ足で教会に向かった。

第4話　幸せのカタチ　後編

教会では僕の顔を久しぶりに見た子供達のはしゃいだり、しがみついたり、もう大騒ぎだった。神父様もバイトを休んだことを咎めることはせず、温かな笑顔で僕を歓迎してくれた。

「そうだ、今日は知り合いの店で買ってきたお菓子があるからみんなで食べましょう」

僕は袋の中に入った数個の箱を取り出した。

「うわあ、クッキーだ！」

「この砂糖菓子すごくきれー」

いくつもあつた箱の中身は食欲旺盛の子供達によって、ものの十数分で空っぽになってしまった。

「これはもしかして、ハミルトンさんの店のお菓子ですか？」

「神父様は知っておられたんですか？」

「ええ。お茶に合うよいお菓子を捜し求めていたときに偶然見つけたんですよ。その時にセシル君の友人のノエルさんに会ったので驚きましたよ」

「彼女の実家がお菓子屋さんだったことは僕も最近知ったんです」

「そうなのですか？しかし、君とノエルさんはもう長い付き合いになるでしょう？」

「ええ。でも、彼女は滅多に家のことを話してくれませんでした。

逆に僕たちのことも家でもほとんど話していなかったみたいなんです」

「何か事情があるのでしょうかね？」

神父様は真剣な眼差しで僕に尋ねた。

あまりにも真剣な眼差しに、僕は思わず彼女の家が家計に苦しいことを話してしまった。

「そうだったのですか。いや、私もあれだけ美味しいお菓子屋さんなのに立地条件があればお客さんも入りにくいとは思っていまし

た」

「資金不足で中心街に引越すことも無理なんです。でも、引越してもしない限りは今のままでは……」

クイクイ。

不意に服の裾を引つ張られ、僕はいったん話すことをやめる。

「どうしたの？」

引つ張っていたのは教会の孤児院の中では最も小さいキユリーだった。彼女は心配そうな瞳で僕を見上げる。

「お兄ちゃん、もうお菓子を食べられなくなっちゃうの？」

「え？」

「キユリー、そんなの嫌だよ。お兄ちゃんが持ってきた『かすてら』もつと食べたい……」

「そうだよ。お兄ちゃんも、カステラ好きだからもつといっぱい食べたいな」

泣きそうな顔のキユリーの背中を優しくさすりながら僕は自分に言い聞かせた。

このままでいいのか、と。

僕は数時間前に約束したばかりじゃないか。
できる限りのことはやると。

「神父様、僕やってみます！」

「セシル君？」

「このまま何もしないでいるより何か行動を起こしたほうがいいと思うんです。立地条件が悪くたって、それ以上のものでいくらくでもお客さんは呼べますよ」

「そうですね。何事もまずやってみることが大事です。私もなるべく街の人に声をかけてみますよ」

神父様もにつこりと笑って協力の姿勢を示してくれた。

そうと決まったら僕も早速、学校に戻っているいろ口コミをしてまわろう。ファトシュレーンの生徒全員に知ってもらえればかなりの売り上げアップに繋がるはずだ。

僕はバイトを終え、急いでファトシュレーンの寮に帰った。

「と、いうわけでまずはファトシュレーン内にビラでも配ろうかと思うんだけど」

寮に帰った僕はいつものメンバーを呼び出し、ノエルちゃんの店のことに對する案の一つを皆に聞かせた。

「ふむ。ビラ配りとは地味な作業だが、このファトシュレーン内なら期待はできるであろうな」

まずはギルバートが賛同する。

「ノエルちゃんの家がお菓子屋さんだなんてちつとも知らなかったよ。ねえねえ、今度皆でいってみようよ」

「うむ。大切な仲間の家がやっている店だ。鼻屑にしてやらねばな」
「……………」

リプルちゃんとギルバートが盛り上がっている横で、珍しくマリノちゃんが渋い顔をしている。

「どうかしたのかい、マリノちゃん？」

「何だ、マリノはセシルの提案には反対なのか？」

ギルバートが訝しげな顔で尋ねると、マリノちゃんは「反対ってわけじゃあないけどさ」とやはり言い出すのを渋っている。

「マリノちゃん、何かいい案があるなら言ってみてよ。別に一つの案に固執しなくてもいいわけだし」

「じゃあ言うけど、セシルはノエルが本気でそんなやり方で客が増えるのを喜ぶと思う？」

「え？」

「ノエルの実家の話はあたしも知ってたよ。でも、ノエルはそのことを別に辛いとは言っていないかったの。たとえ貧乏でも両親と一緒にお菓子を作ることができるならそれでいいって、あの子は言った」

「あ……」

昼間、言っていたノエルちゃんの言葉がふつと頭に浮かんた。

「ノエルから少し前にあんたが来て以来、ことあるごとに訪れてい

ることも聞いているよ。その度にいっぱい買って言ってくれて嬉し
いって。それでいいんじゃないの？あの子もあんたに喜んでもらえ
て充分満足しているはずだよ」

「でも、このままじゃお店は潰れちゃうよ。ノエルちゃんは、僕に
僕のパーティに入ることと協力してくれているのに、僕は彼女のた
めに何もできないなんて辛いよ」

「だったら、あんたが毎日お菓子を買いに言ってあげればいいでし
よ？」

「え？」

「バイト二つも掛け持ちしているんだから、お金は余っているはず
よね？故郷に仕送りする分を省いてもさ」

「う、うん……」

「なら、そのお金で毎日お菓子を買ってあげなよ。あの子、きつと
喜ぶよ」

「そ、そうかな」

「なに自身なさそうな顔をしてんのよ！あんたが言い出したことで
しょうが。最後まで責任もって協力してあげなさいよ！」

マリノちゃんは笑いながら僕の背中を思いきり叩く。

すごく痛かったけど、さっきまで頭の中でもややもやしていたもの
が晴れたような気がした。

「ありがとう、マリノちゃん」

「まったく、少しは仲間の気持ちも汲んであげなさいよね。これか
らしばらくはずっと一緒なんだから」

「うん」

「どうやら、自然にけりがついたようだな」

「そうだね。ねえギルちゃん？」

「うん？」

「今度、皆で一緒にノエルちゃんのおうちに行こうね」

「うむ、そうだな。皆でな」

「はいはい、提案！」

マリノちゃんが元気よく手をあげる。

「その時はあ、毎回セシルのおごりつてことにしない？」

「へー？マリノちゃん、勝手に何てこと言っただよ！」

「だって、さっきお金余ってるんでしょって聞いたらうんって頷いたじゃない」

「いや、そうだけど、それでも限度つてものが…」

「はあ？聞こえないなあ？」

「くっそ、マリノちゃんには適わないなあ…」

ギルバートとリップルちゃんが僕たちの様子をおかしそうに笑う。

マリノちゃんも笑っている。

この場にノエルちゃんがいたならきつとノエルちゃんも――

そうだな。

幸せの形は何も経済的に豊かになることだけじゃない。

好きなことを好きな人達とやっていられることこそ、ノエルちゃんにとって何よりも幸せだったのかもしれない。

第5話　レアードの災厄、再び　前編

今週も再びやってきた週末の土曜日。

学校がない日はドクターの特訓も休みになるから実質、三連休ということになる。

もちろん、それでは修行の意味がないので休日の日もギルバートに主に本格的な戦闘の手ほどきを受けている。そのおかげで、実戦における判断力とかも少しずつ向上していると思う。グラッツ先生達の試験を受ける以前に比べて格段に動きはよくなっているはずだ。「行くぞ、セシル！この銃弾の嵐を切り抜けてみる！」

男子寮から少し離れた林の中で僕とギルバートの一对一の特訓が続いている。

「サンダーチェイン！」

すっかりお馴染み、僕が得意とする雷の魔法だ。今回は弾数が多いときによく使う鎖の形だ。

鎖の攻撃というと直線的なイメージがあるが、これは魔力の操作一つでしなやかに曲がる。

バチバチと音を立てながらギルバートの撃った銃弾を逆に撃ち落とした。

「珍しいな、鎖の形か。初めて使うのではないか？」

「いや、そんなことはないよ。今までも乱戦になったときとか、君が勝手にずんずん前に出てしまったときの後処理に使っているよ」

「むう、若干耳が痛いことをサラリと言っておって…」

ギルバートは気まずそうに頭を掻きながら「それにしても」と続けた。反省の欠片はまるでないね。

「普段、貴様やマリノ達と戦っているだけに初級魔術士の魔法実技の授業が実に退屈でしょうがないのだが…」

おっと、久々に出た。

最近はあまり愚痴をこぼさなくなったと思っていたのに。

「わからないではないよ。だけど、初級、中級クラスで基礎を固めることは大事なことだよ」

「しかし、お前は確か中級クラスは飛び級したのであるう？それは技術だけでも乗り切れるといういい証拠ではないか」

「その通りさ。だから今こんなに苦労しているんじゃないか」

僕は親指で自分の胸を指した。

「確かにギルバートは僕達、上級クラス以上と一緒に戦っているから、形についてはだいやり方を飲み込んでいるかもしれない。だけど、技術だけじゃ賢者にはなれないよ」

「…別に我輩は賢者になろうとは思わないのだがな。戦闘で使える技術が見つかればそれでいい」

「そういえば、ギルバートはどうしてこの学校に編入してきたんだい？いろいろ事件があったからずっと聞いていなかったけど」

「言ってなかったか？戦士養成学校からの命令で…」

「それは聞いたよ。そうじゃなくて、どういう命令を受けたんだろうなと思って」

「……………」

僕の質問にギルバートは難しい顔をする。何だか、考えているというより怒っているという感じに見えるけど、別に彼を怒らせるようなことはしていないよな？

「もしかして、嫌なことだったら話さなくてもいいよ」

僕は場の気まずさを感じて、そう付け加えた。

誰にだって、嫌な過去の一つや二つあるだろう。それを根掘り葉掘り聞くことはあまりに無神経だ。

「……………」

ギルバートはまだ難しい顔をしている。

「ギルバート、無理しないでいいってば」

僕がそう言っても、ギルバートは低い声で唸ったまま表情を変えない。

「……………実は」

少し経って、彼はようやく普段の顔に戻り、そして申し訳なさそうにつぶやいた。

「実は、命令の細かい内容については我輩もよく聞かされていないのだ」

衝撃の事実だった。

まさか彼自身も内容をよく知らなかったなんて。

「我輩はただ、我輩の担当教官殿にここに行くようにと命令されただけなんだ。その時も教官殿は細かい詳細などは一切おっしゃらなかった」

「そうだったんだ。でも、何も聞かされていなかったのによく命令に従う気になるね」

「教官殿は我輩にとって理想だからな。あの方がここに行けと言うのなら黙って従うさ。それに…」

「それに？」

「少なくとも教官殿は意味のない命令をする人ではなかった。必ず、最後には我々養成学校の生徒達に何かを掴ませてくれた」

「ふん…」

もし、ギルバートのいう教官の人物像が正しかったなら、教官はどうしてファトシュレーンを選んだのだろうか。

確かに魔法学校の中では実力主義といわれてはいるが、それだけで今まで魔法を知らなかった者を送り出すものなのだろうか。

「わからないなあ…」

渋い顔をして唸る僕の肩をギルバートは笑って叩いた。

「そう唸るなセシルよ。確かに我輩は内容もよく知らぬ命でここに来たが、今はすっかり落ち着いているではないか。クラスに慣れるにはもうしばらく時間が必要だがな」

ギルバートは豪快に笑いながらバシバシと僕の肩を叩くと、そのまま林の中に紛れて去っていった。

まあ、本人が気にしていないのならそれでいいか。

土曜の昼下がり。

僕は特になさることなく自室で賢者認定試験対策の問題集を解いていた。

（このこととこつちは合ってる…と）

大魔導士になってから何度もやっている問題集のうちの一冊。復習も何十回したかわからないから、ほとんどわからない問題はなかった。

（やつぱり、同じ問題を反復したら正解率が上がるのは当然だよなあ。新しい問題集がほしいけど、賢者用の試験対策問題集はボリュームがあるから高いんだよなあ）

といつてもバイトを二つ掛け持ちしている僕には問題もない値段なのも事実である。

（しょうがないよ、こればかりは）

いくら早く賢者になれても、家族の今の生活を潰してしまうわけにはいかなかった。少し前に母親から何とかパートで生計を立てているという話は手紙で知ったが、それでも育ち盛りの妹がいるし、彼女の学校のこともある。やつぱり僕が支援をしなければ一日食べるのも苦労するだろう。

僕は問題集用のノートの上に赤ペンを転がした。

点数は九十八点。

何度もやった問題なのだから百点を取れないとおかしいはずなんだけど、意外とそうはいかないのが人間の記憶の不思議なところだ。必ず、どこか一問はケアレスミスをしてしまう。

「ふう…」

ため息をつきながら机の背もたれにだらしなくもたれかかる。

窓から見える太陽はまだ高い位置にある。

今日も熱い一日だ。

もうすぐ、また夏がやってくる。

暑い夏が……。

ドゴォーン!!

思わず背もたれから落ちそうになるような大爆発が街のほうから聞こえた。

「な、何だ!?!」

僕は窓から状況を確認しようとするが、ここからだ和林に阻まれて街から昇る黒煙しか見えない。

僕は部屋から出ると、そのまま寮の外へ、街へ向かって走った。

既にファトシュレーン内でもいくつかの戦闘が起きていて、生徒達が懸命に戦っている。

「セシル!」

「セシル君!」

僕と反対側から走ってきたのはマリノちゃんとリプルちゃんだ。

「よかった。二人とも、無事だったんだね」

「うん!」

「あつたり前でしょ!それより、何があつたの?街で急に爆発が……」
ドゴォォ!

僕達の会話を遮るように再び大きな爆発音。

「こりゃ、実際に見に行くほうが早そうだ」

僕の一言にマリノちゃんトリプルちゃんは小さく頷いた。

「ところでギルちゃんは?」

「わからない。僕が寮を出て行った時にはもう姿が見えなくて……」

「大丈夫だよリプルちゃん。あたしらの中で一番頑丈なあいつがやられるわけないでしょ?」

「う、うん。そうだよね!」

リプルちゃんは走りながらほんの一瞬だけ微笑んだ。

「そっいえばノエルちゃんはどうしたの?今日は一緒じゃないのかい?」

「あの子、今日は一日お店の手伝いをするって言ってたから遊ぶ約束とかはしてなかったよ」

「じゃ、まずはノエルちゃんのお店に向かおう。路地裏だから襲撃されたら逃げ場がない！」

『了解！』

僕達は戦場と化したレアードの街を走りぬけ、ノエルちゃんのお店がある裏路地に向かった。幸い、裏路地はどこも手がつけられておらずノエルちゃんの家も無事だった。

「貴方達は確か、ノエルのお友達の…」

店に入ってすぐに出てきたのはノエルちゃんのお母さんだった。

「お母さんは無事だったんですね！」

「ええ、貴方達も。それより早く教会に向かってちょうだい。ノエルはそこに向かったわ」

『わかりました！』

僕達はノエルちゃんのお母さんに頭を下げると、ノエルちゃんがいるという教会へと向かった。あそこには子供達もいるし、この間みたいに被害がないことを祈るばかりだ。

第5話　レアードの災厄、再び　中編

その頃教会では神父とノエルが懸命に魔物の進行を食い止めていた。

「ガルルル…」

魔物達は一步また一步とノエル達を追いつめていく。

「これ以上退がるのはまずいですね。この奥には子供たちがいるというのに…」

神父がこの状況でも声の調子を変えずにつぶやくが、その顔は明らかに焦っていた。

「神父様は子供達と一緒に避難してください。魔物達は私の魔法でひきつけますから！」

「お気持ちはありがたいのですが、その提案は辞退させていただきますよ。子供達の命も大事ですが、貴方の命もまた神より授かりしもの。粗末に扱わせるわけにはいきません」

神父はノエルに襲い掛かってきた魔物の一匹を冒険者用のロッドで一閃する。

「それに、私の予想ならばもう少ししたら彼が来てくれるはずです。この子供達のことを彼は愛しているはずですから」

「私も、もうすぐ友達が助けに来てくれると信じています。きっと…」

そんなことをつぶやく二人に不思議と恐怖心はなかった。

「ノエル！」

マリノちゃんが壊れた教会の扉を踏み越えて中に入る。

くそ、少し遅かったか。教会の中には既にたくさんの魔物が入り込んでいた。

「ノエル、今助けるからね」

マリノちゃんが短剣一本で魔物の群れに突進していく。

僕とリプルちゃんて突貫する彼女を援護する。

今日のマリノちゃんはとても冴えていた。

武器が新しくなったこともあるのだろうが、それ以上に動きにキレが出ている。

（特訓で強くなったのは僕だけじゃなかったんだ）

仲間たちもまた、確実に強くなっている。

「僕も負けてられないな」

「セシル君、どうしたの？」

フツと笑みをこぼす僕を見てリプルちゃんが怪訝な顔をする。

「いや、大丈夫。ちよつと頑張らないとなゝって気合をかけただけ。

さあ、一気に畳み掛けるよ！」

「うん！」

僕は後衛から前衛に切り替わり、マリノちゃんが倒し損ねた敵や神父様達に襲い掛かる魔物を魔法を付加した剣で払いのけた。

戦闘は十数分で終わり、教会の中に入り込んでいた魔物は全て撃退した。

すぐに神父様が子供達の確認に向かったが、子供達は全員無事のようにだ。

「よかった……」

「セシル君、ノエルさん、ありがとうございました。しかし、あなた達の助けを必要としている人達はまだまだたくさんいるはずです。さあ、ここはいいから早く行ってあげなさい」

「はい！神父様、子供達をお願いします」

神父様に頭を下げ、僕達は教会を後にした。

「ノエルちゃん、実はここに来る前に君の家に寄ったんだ」

「え！？お母さんに何かあったの！？」

ノエルちゃんの顔が真っ青になる。

「おばさんは無事だよ。ちゃんと避難するように言っておいたから

今頃ファトシユレーンに向かっているはず……ひゃあ!？」

「危ない！」

マリノちゃんに向けられた突然の爪攻撃から助けてくれた一つの影。

「大丈夫か、マリノ！」

長い槍を持った長身の男性、がっしりとした肉体の男性と流れるようなストレートヘアの女性。

「フレッドさん！それにグラッツ先生、セリカ先生！」

「セシル、中央通りは俺達に任せろ！」

「それより学校に戻って！さっき、生徒会の子が私たちに報告に来てくれたんだけど、学校に今まで見たこともない魔物が侵入してしまったみたいなの！」

「……！」

「フレッドさん、セシルたちをよろしくお願いします。ここは俺とセリカ先生で食い止めます！」

「わかりました！」

フレッドさんはビシッと敬礼をすると、僕達と共に学校へ戻る道を走った。

「フレッドさん、いったい何がどうなっているんですか!？」

「わからない。街の入り口近くで変な影を見たという目撃情報があったんだが、その直後にあの爆発だ。情報収集をしているところをグラッツ先生達と会ったんだ」

「そうだったんですか」

「それよりもマリノ、怪我はなかったか？」

「は、はい。あたしは何とも……。それよりフレッドさんのほうが腕を……」

「ちよつとしたかすり傷だ。戦闘に支障はないよ」

フレッドさんはそう言っているが、ひじ下からは時折血が流れ落ちていた。しかし、本人が大丈夫と言っているのならここで敢えてリプルちゃんに回復してもらうことはないだろう。今は、回復して

いる時間すら惜しいんだ。

僕達が学校を出てからまだ一時間ほどしか経っていないというのに、この学校の崩壊具合はどうしたことだ。

（グラッツ先生の言っていた魔物達の仕業か…？）

「セシル、やっと戻ったか！」

「今までどこをほつつき歩いていたんだ！」

校門を越えたメインストリートで合流したのはギルバートと寮長さんだ。

「あちこちで瓦礫の山ができています。我々はその救護をしていたのだ」

ギルバートが手短に現状を説明する。

「避難所の体育館まで市民を無事に誘導しつつ、瓦礫に埋まっている者の救護に当たってくれ！魔物と出会っても戦いは最小限に控えるように！生徒会の面々と先生方がそちらを担当してくれている！」

「わかりました！」

「ギルバート、君もセシルについてあげてくれ！」

「しかし、それでは寮長殿が…」

「俺の心配なら無用だ。後は、もう一度メインストリートを巡回して俺も校舎に戻る」

「了解した！いくぞ、皆の者！」

ギルバートを先頭に僕達は再び校舎へと走り出す。

レアードの市民達は瓦礫と魔物の遭遇に驚異しながらも避難所の体育館を目指していたが、この道のりはあまりにも過酷だ。

僕の雷やノエルちゃんの炎、リプルちゃんの回復魔法を使いながら順調にレアードの人達を体育館へと導いていく。もちろん、戦闘も避けられない。いくら、先生達や生徒会の人達がいるといってもこの数进行处理するのは厳しすぎる。僕が所属する大魔導士クラスを

筆頭に高等、上級魔術士の生徒達も率先して魔物の駆除に当たっていた。

「セシルー！」

（あの声は…… ウェスリー？）

僕は聞き覚えのある声が聞こえた方向に顔を向けた。彼は手を振りながら僕たちのほうに走ってきた。

「はあはあ、やっと会えたぜ。いくら探してもお前だけクラスの奴が見つからなくて心配していたんだ」

「他の皆は無事なのか？」

「ああ、俺達のクラスは西側の校舎を担当している。お前も早く来てくれ！」

「……ごめん、ウェスリー。今は仲間と一緒に街の人達を避難させるほうが先なんだ」

「マジかよ！こつちも人手不足で大変だったのに……！」

ウェスリーは相当苛立っているのだろう。来ることを拒まれてグシャグシャと頭を掻きむしっている。

「セシル君、行ってあげなよ」

最初にそう言ったのはリプルちゃんだった。

「私達はこれだけ人数がいるんだもん。大丈夫！」

ノエルちゃんも可愛らしくガッツポーズを取ってみせる。

「だけど……」

いくら大人数とはいえ、やはり仲間のほうも心配だ。

くっ、僕はどっちを取ればいいんだ！？

第5話　レアードの災厄、再び　後編

「ヒヤッハア！アブねえアブねえ、危ねえぜー！！」

突然、上空から聞こえてくる甲高い声。

ドズン！

そんな音を立てて、そいつは僕達の前に立ちはだかった。

「ヒヤッヒヤッヒヤ、空からずっと見ていたぜえ。ちよいと花火を上げただけで大わらわだなあ。人間の結束力ってのはたいしたものだねえ」

男は明らかにおかしかった。

何がおかしいって全てにおいてだ。大まかにみれば体つきこそ確かに僕ら人間と何も変わらないが、よくよく見ればわかる。

鋭く尖った目に、まるでゾンビのような黒っぽい体の色。そして何より、あの爆発を『花火』と言う精神の異常さ。

加えて自分も人の体をしているのに他の人達のことを『人間』と言ったこと。

「お前はいつたい誰だ！」

フレッドさんが男を指差し叫ぶ。

「俺？俺はなあ……やっぱやめよう。俺とこいつらを満足させられたら教えてやるぜ」

男はそう言って羽織っていたマントを脱ぎ捨てた。

『！！』

僕達は全員、目を疑った。

錯覚だろうか…。

男がマントを脱ぎ捨てた瞬間に男の周りに魔物達が現れたのだ。

「なあゝに、呆けた顔をしてんの？俺の名前、知りたかったら俺達と遊んでみな」

男はけたたましい声で笑いながら、魔物達を突貫させる。

完全に狂っているとしかしいようがなかった。だけど、こんな奴の

遊びでレアードの街を、ファトシユレーンを壊されてたまるか！
とにかく前進してくる魔物は倒す！

「おりゃあ！」

僕とフレッドさんのダブル攻撃で魔獣を一体ノックアウトさせる。
しかし、その隙を狙って次の魔物達が束になって襲いかかる。

「研ぎ澄まされた氷の刃よ。獰猛な獣となりて噛み砕け！ブリザードファンゲー！」

僕たちの後ろから鋭い氷の牙が魔物を砕く。今のはもしかして…。
「セシル、援護は任せな！伊達に大魔導士やってねえってことを思い知らせてやるぜ」

やっぱりウエスリーだ。氷系魔法といえば彼の得意分野だからな。
「ありがとう。でも、無理はしないで！」

「言われる間でもないぜ！」

ウエスリーはニツと笑うとすぐに次の魔法詠唱にかかる。ウエスリーの氷の刃を見て、後衛の女の子達にも火がついたのか僕達の後ろから次々と攻撃魔法が飛んでいく。

「なかなかやるじゃん」

魔物達の後ろに立っている男は余裕の表情で口笛を吹いている。
完全に僕達のことをなめているな…。

「怒るなセシル。相手の出方がわからんのだ。下手に突貫するのは得策ではない」

ギルバートが冷静に相手を分析する。悔しかったが、僕はギルバートの言葉に小さく頷き、目の前の魔獣達に視線を戻した。

ズババババ！

横からの鋭利な衝撃波が魔物を斬り裂いた。

（今のは魔法力の衝撃波！？）

そして、この威力は…。

「この馬鹿！あれほど戦闘は避けると言っただろ！」

「寮長さん！」

「まったく。どうしてお前はいつもいつも…」

ぶつくさ文句を垂れながら歩きで戦闘空間に入ってくる寮長さん。
「お前が元凶だな。すぐにその魔物達同様に退治してやる」

「へっへえ、偉く強気だねえ。そんじゃま、その強気を買って少しだけ相手をしてやるよ」

謎の男はやる気なさそうに立ち上がると、寮長さんと対峙した。

（寮長さん、いつになく本気の目だ）

戦いのときはあんな目をする人なのか。

僕は魔獣との戦いを一瞬忘れて、二人の戦いの行方が気になった。

「こら、馬鹿セシル！」

ズド！

危ない！

マリノちゃんの矢の魔法が放たれていなかったら、僕は一瞬で魔獣の詰めの餌食になっていただろう。

僕はすぐに戦闘空間に戻り、残りの魔獣達を倒していった。

アキトは短剣を構えながら、ゆっくりと謎の男との間合いを詰めた。どちらかというとあまり武術の類は得意ではないが、魔法詠唱の時間を稼げればいい。

両者が軽快に地面を蹴る。

「てやあ！」

アキトは思いきり短剣を縦に振る。しかし、男はそのナイフを右腕でガードしただけだった。

「なっ！？」

「ふゝん……」

男は短剣の切れ味を確認するように、その刃とアキトとを交互に見る。

「こんなおもちやで俺の腕を斬ろうっていつのも愚かだが、もっと愚かなのはあんただな。あんた、武術とか得意じゃないでしょ？」

「！！！」

「斬りつけ方でわかるぜえ。時間稼ぎ程度のつもりだったんだろっ
が無駄なこったな」

男は不気味な笑みを浮かべる。

「無駄なことはない……」

アキトもニヤリと笑う。

「詠唱はもう完了しているんだ！」

アキトは空いている左手を謎の男の腹部に当てる。

「バーンファイア！！」

ポボン！

まるで爆発にも似た火球を男は至近距離で受けた。いくら短剣を
素手で受け止めた男とてこの距離でこの魔法を受ければ多少ダメー
ジを与えられるはずだ。

（やったか？）

アキトは男と距離をとり、爆炎を見守る。後ろで戦っていたセシ
ルたちも今の爆炎には全員注目していた。

「……それで終わり？」

「！！！」

爆炎の中から響く低い声。さっきのようなけたたましい笑い声を
出していた人物とは思えないほど、その声は低かった。そして次の
瞬間、アキトはセシルたちが戦っていたところまで吹き飛ばされた。

「寮長さん！」

僕は戦うのをやめて彼のほうに駆け寄った。

「しっかり！しっかりしてください寮長さん！」

「最上級の魔法で……ダメージを与えられなかっただろ？」

「喋っては駄目です！」

僕はまだ戦闘空間にいたリプルちゃんを大声で呼んだ。

「寮長さんの手当てを頼む！」

リプルちゃんは硬い表情で頷き、寮長さんに回復魔法をかける。
「もうちょつと楽しめるかと思ったんだけどねえ。魔法使いつての

は案外ひ弱だったんだね」

男はケロっとした顔で言う。あの様子だと、本当にダメージを受けていないようだ。

「ば、化けモンだぁ…」

ウェスリーが後ろで歯を鳴らしながら恐怖している。

「なぁ〜んか興がそげちゃったなぁ。久しぶりにやる気になったのにさぁ…」

男は肩をすくめて言いながら、フワリと魔法詠唱もしていないのに宙に浮いた。

「今日はこのくらいで帰るとするか。このくらいやれば様子見には十分でしょ」

「様子見？」

ノエルちゃんが小さな声で言う。

「そ。まあ、近いうちにまた来るかもね。その時はまた話し相手になつてくれよ。ヴァイスって声をかければ振り向くからさ」

ヴァイスは笑いながらそのまま空に向かって去っていった。

「いったいなんだったのよ、あいつは…」

「わからない。わからないけど…」

近いうちにあいつとは再び対峙する。

そんな予感がした。

その夜、僕は一人寮の庭にいた。

「こんなところにいたのか」

「ギルバート…」

「どうしたのだ？帰ってきてからずっとその調子だが？」

「どうしたのだって、言うまでもないだろ。またレアードは魔獣に襲われた。しかも今度はあんな狂人までやってきて！僕達は、本当にこの災厄からレアードを守りきれるのかな…？」

「それは、誰しも思っていることだろう。実際、あんな強さを見せつけられては誰も何も言うことはできん。ウェスリーの言っていたとおり、あれは本当の化け物だ」

「……………」

「あんな奴がこの戦いに本気で参戦してきたのなら、我らに勝ち目はないだろう」

「そう……………だよな」

今のままでは絶対にこの街を守ることなんてできない。
成す術がなかった。

「こんな調子でちゃんと賢者になれるのかな……」

隠していた不安をボソリと口にしてみた。

ギルバートは何も言わない。

あれだけの戦闘があつたのに、夜空は今日も満天の星空だった。

第6話　流れ込む暗雲　前編

暗黒の休日明け、僕はいつものようにドクターエックスの特訓を受けるため、コロシウムに向かっていた。

一昨日にあんなことがあったばかりなのに特訓なんかしていられるかと思ったが、それを聞き入れてくれるほどドクターエックスは甘い人物ではなかった。今のファトシユレーンにはもっともってやることがあるはずだ。このような戦闘特訓なんて今は何の意味もなさないはずなのに…。

「おはよう、ギルバート」

僕は寮の一階で同じように特訓のため下足箱で靴を履き替えていたギルバートに挨拶をかける。

「うむ…」

顔を見るだけでわかる。

やはり彼も相当不満なのだ。

「まあな…」

そうなのかと尋ねた僕にギルバートはやはり不機嫌そうにつぶやいた。

「このような時に我々だけ特訓を受けていてよいのか？今は戦う以外にもやることははずだ」

「その理屈はよくわかるよ。とにかく今はドクターのもとに行こう」
ギルバートはやはり不服そうに頷くと、僕と一緒にコロシウムへと向かった。

途中でマリノちゃんリプルちゃん、ノエルちゃんとも会ったが、皆が皆揃って同じような顔をしていた。

「私ね、お父さんが病院の先生なの。こういう時、お父さんだったらすぐに患者さんの元に駆けつけていたよ。なのに、娘の私は患者さんのところに行かないでこんなものを持って戦いの場へ行こうとしている…」

「……………」

リプルちゃんの言葉に誰も反応できなかった。

僕達は助けられる人々を放って、自分達の欲求を満たそうとして
いる。

コロシウムにはドクターが一人立っていた。一昨日の襲撃でコロシウムもだいぶ襲撃を受けていたようだ。入り口に立っていた像や闘技場の所々に亀裂が入っている。観客席も瓦礫だらけだ。

「遅いぞ。全員五分の遅刻じゃ」

ドクターエックスはいつもと変わらない様子で、遅刻したときの体罰である落雷を僕たち全員に落とす。

「大方、遅刻の原因は想像がついておる。学校や街がこんな状況なのに果たしてこの特訓に何の意味があるのかと言いたいのじゃろ？」

「わかつているのならどうして…」

「だからといってそれがどうして特訓をやめる理由になる？」

ノエルちゃんの言葉を遮ってドクターが問う。

「今、市民はおるか我が校の生徒達もほとんどが重軽傷を追って寝込んでいる者ばかりじゃ。そんな時に誰が戦場に赴いてここを守るというのじゃ？」

「だけど、怪我をしている人をみすみす放っておけないよ！」

「生徒会の人達や保健委員の人達だけでは人手不足なのはドクターも知っているでしょう！？」

リプルちゃんとノエルちゃんが食い下がる。

「では、お主達がそちらに加わって何が変わるというのじゃ？」

「え？」

「一人が二人になってどうにかなるか？今、やるべきことは皆の傷の手当だけか？」

「……………」

「以前までとは違う今こそ、我々一人ひとりがそれぞれつくべき役割につかねばならん。本来なら調査や戦闘関連は生徒会の役割じゃ。しかし、その生徒会も上役一名が重傷を負ってやむなく救護に回っ

ておる。今、生徒会の役割を担えるのはお主らしかおらん。これは、わしもファトシユレーンの教職員達も一致の結果じゃ。数日はしんどいだろうが、今回の事件の調査や残党の処理、その他もろもろの仕事に当たってもらうことになるだろう」

「生徒会の仕事を僕達が…？」

「しかし、この状況で学校など…」

「学校は建物をわしらが修復する間休校じゃ。予想以上のダメージを追っておるから材木からもう一度作り直さんといかんかもしれない。まあ、材木が集まったら我々がすぐにでも建物を魔法で修復にかかるから、そう長い休みにはならん。残念じゃったな」

ドクターエックスはそう言って微笑する。

「頼むぞ。この期間中に奴らが再び現れた場合、対抗できる力を持つのはお主らしかおらん」

僕達しか戦える生徒がいない。

想像以上に過酷な事実には僕は眩暈さえ覚えそうだった。

ドクターエックスの特訓が終わり、僕とギルバートは男子寮に戻った。

「……………」

ギルバートと別れ、僕は寮の階段を上り寮長さんの部屋を訪れた。

「寮長さん、おはようございます。入りますよ」

控えめにノックをしてから扉をそつと開けて中に入る。

「セシルか…。どうだった、特訓は？」

「寮長さん、何で特訓のことを知っているんですか？」

「予想はつくよ。今、この状況であの魔獣達とともに戦える力を持つているのはお前たちだけだからな」

「……………僕たちだけでどこまでできるのでしょうか？」

「さあ、それはわからないな。でも、俺もまたすぐに復帰するさ。」

生徒会長に回復魔法をかけてもらっているおかげでだいぶ傷はよくなっている」

「そうですか、よかった。そうだ、さっき食堂のおばちゃんからりんごをもらったんですよ。よければ一個どうぞ」

「ありがとうございます」

「寮長さん、早く良くなってくださいね」

「ああ、そうするよ。君達に生徒会の任を背負わせるのは少々不安だからね」

寮長さんは冗談交じりにそう言うと、弱々しく笑った。

朝食を食べ終え、僕は学校の様子を見て回った。校舎の外には主に教職員達が学校の修復をするために数箇所に分かれて作業をしている。

（ここには僕の出番はなさそうだな）

ドクターはああ言っていたけど、やっぱり今僕達がすべきことはレアードの人々を助けることだ。

そうと決まれば、早速困っている人達を助けに向かう！

第6話　流れ込む暗雲　後編

僕はまず教会に向かった。あそこにもだいぶ魔獣が入り込んでいたから子供達も不安になってしていることだろう。僕が行って勇気付けてあげなくちゃ。

「あれ？」

街の中央通に差し掛かったところで、僕は見覚えのある女の子達と遭遇する。

「ラウナちゃん、ノエルちゃん」

「あ、セシル君」

「こんにちは、セシルさん」

二人は丁寧な挨拶を返す。

「こんなところで何やっているの？」

「レアドの人達に元気を分けてあげたくて、クッキーを配っているのよ」

「クッキーを？」

「これなら作業しながらとか寝ながらでも食べられるでしょう。早く元の活気ある街に戻したいですから」

「そうだね……」

「セシル君は、これからどこへ行くの？」

「教会に行くんだ。子供達を元気付けにね」

「それならこのクッキーをもって行ってあげたらどうですか？」

「ありがとう。子供達、きっと喜んでくれるよ」

「小分けにしちゃってるからたくさん持っていけないといけないけど、持てそう？」

「大丈夫。魔法で浮かせながら行くから」

「そう。じゃ、これ」

ノエルちゃんとラウナちゃんが差し出したのは十袋以上にもなるクッキーの入った透明な袋。

「落とさないように気をつけてね」

「浮遊の魔法は集中力が大事ですからね」

「ハハハ、気をつけます」

僕は袋を見つめながら、力の言葉をかけて頭上に浮かせるとノエルちゃん達の露店を後にした。

窓ガラスがほとんど壊れられて、吹きさらし状態の教会。

学校を修復するのに手一杯で街のほうにはまだ先生達が派遣されていないようだった。

「お客さんはセシル君でしたか」

僕の気配に気づいたのだろう。

神父様が思い扉の隙間から顔だけ出して言った。

「挨拶もなしにすみません。子供達の様子を見に来たんです」

「それは喜んでくれますよ。ただね……」

神父様は急に険しい表情になる。

「以前からの襲撃のこともあってか、二人ほど外に出られなくなっていました……」

やはり恐れていたことが起きてしまった。

しかし、無理もない。

今回の襲撃はずいぶん計画的に行われていたようで、襲われた箇所は中央通りとファトシュレーンの主に二箇所と限定されていた。そして、外れとはいうもののこの教会も中央通の一角にあるため、今回の襲撃を受けてしまった。

（あんな怖い思いをして平然としていられないのが普通の反応だものな）

それとただ単に子供達にはこの襲撃の事の重大さがわかっていないだけだろうか。

「またクッキーを持ってきたんです。少しでも元気付けようと思って」

僕は魔法で浮かせているクッキーの袋を扉の隙間越しに神父様に見せた。教会の扉がゆっくりと開かれる。

「変な警戒をしてみませんでした。さあ、どうぞ」

神父様はにつこりと微笑み、僕を中に入れる。

「実は少し前にリプルさんが来てくれましてね」

「リプルちゃんか？」

「ええ。彼女も、ここでよく子供達と遊んでくれましたから」

考えてみれば、この教会で最年長の孤児達はリプルちゃんと年が近かった。

「リプルちゃんは今、どこに？」

「例の二人が寝ている部屋にいます」

「そこに僕を案内してください」

僕の言葉に神父様は小さく頷いた。

こんなクッキーで何とかなるとは思えないけど、このクッキーで少しでも元気を出してもらいたいから。

「あ、セシル君」

部屋に入るなり、リプルちゃんは僕のほうに歩み寄ってきた。

「二人の様子はどうか？」

「だいぶ落ち着いているけど、外に連れて行こうとすると暴れだして、この部屋からも出ようとししないの」

「そっか」

僕はリプルちゃんの頭を撫でると、二人のベッドの前に歩み寄った。

「お兄ちゃん……」

一人が恐怖に怯えた目で僕を見上げる。

「大丈夫、君達を外へ連れ出したりはしないよ。ただ僕は君たちにクッキーを持ってきたんだよ。この間、皆に好評だったお店のクッキーだ」

僕の言葉に彼らを囲んでいたほかの子供達が次々と僕の周りに集まる。

「今、ちゃんとあげるから仲良く座って待っていなさい」

そう言って、僕はクッキーが入った袋の紐を解く。

ちょうど良いタイミングで神父様がティーセットを持ってきてくれて教会の中は少しだけだが、元の明るさを取り戻したようだった。「じゃ、僕はそろそろ行きます」

時計の短針は既に五を指していた。

「これからどこへ？」

「もう少し街の様子を見てきます。僕のような子供では何もできないかもしれないけど、現状だけは知っておきたいから」

「気をつけて…」

「はい」

僕は神父様とリプルちゃん、それに子供達に別れを告げて、今度は町の入り口を調べてみることにした。

やはり最初から中央通りと学校が狙いだったのだろう。町の入り口はほとんど建物の損壊がなかった。

（どうしてまた中央通りと学校だけ狙ったんだろう？中央通りは町の中心地だから狙うのはわかるとしても学校って…？）

僕にはそこがずっと引かかっていた。

学校を狙う意味は何なのだ？

他の魔法学校のヤラセ？

それはないか。そんなことをしたら直ちに魔法協会からその学校が抹消されるだろうし。でも、ほかに考えられる可能性って何だろう。

うーん…。

ウーん…。

umm。

「駄目だあ！」

いくら考えてもわからない。

結局、あいつらは無差別に攻撃をしてきているだけなのだろうか。でも、無差別だったらレアーダだけが襲われるなんてことはないだろうし…。

「こらせシル！」

やたらと野太い大声に僕は思わず肩を震わせた。

「ダ、ダイゴ先生！」

やばい人に見つかったなあ。

「今は何時だ？言ってみろ！」

「六時十五分……です」

「門限の時刻は！？」

「六時……です」

「わかつているならさっさと寮に戻らんかぁー！！！」

「は、はいー！！！」

僕はまるで鬼から逃げるように全力ダッシュでダイゴ先生から離れた。先生のお仕置きを食らう前に…。

ドーン！

「みぎゃあー！」

はい、逃げ切れませんでした。

僕は痺れをこらえながら何とか立ち上がろうとするが、それよりもダイゴ先生が追いつくのが早かった。

「久しぶりに受けたお仕置きの感想はどうだ！？」

「い、いたひです…」

「まったく、たいした洞察力もないくせに現場あさりとは十年早いわ！」

ダイゴ先生は持っていた竹刀で僕の尻を思い切り叩く。

「！！！！」

声にならない痛みが僕を襲う。

そこはまだ痺れが残っている場所なのにいー。

「事件が気になるのはわかる。ことお前やギルバート達に関しては

何度も大きな戦いに巻き込まれているからな。だが、門限を過ぎていいことにはならないぞ」

「はい、注意しますう……」

「わかればよろしい。ほら、とつとと寮へ戻れ」

ダイゴ先生から解放され、僕はふらついた足で走る。走りながらダイゴ先生の顔色が気になった。

目は充血していたし、クマだらけ。

ろくに寝ていないのだろう。

あんなになつてもちゃんと寮の仕事もこなすんだからやっぱり尊敬してしまう。でも、僕達にだって手伝えることくらいあるはずだ。生徒会の人達も先生達も皆、頭が固すぎるんだよ。学校を守りたいのは僕たちも同じなのだ。どうして同じ志を持つもの同士協力し合えないんだろうな。

つくづく大人の考えることというのは理解ができない。

第7話 ドキドキ。初めてのお迎え 前編

相変わらず今日も学校は休校だ。

少し日が経って、瓦礫の数はだいぶ少なくなってきたけど、相変わらず校舎のほとんどはまだまだ大幅に修復が必要だ。

寮から学校へ行くための道には板でできた簡易掲示板が設けられ、学校再開の目処やその他諸連絡が毎日更新されている。

僕はいつものようにドクターエックスの特訓を終えて、この掲示板を見に来ていた。

（昨日とあまり内容は変わっていないな。相変わらず生徒会の人達は大変そうだし）

寮長さんの具合もだいぶよくなってきていて、あと二日もすれば完全に復帰できるそうだ。

そういえば、寮長さんの治療を行っていたのは生徒会長さんだったらしいけど、それらしい人を男子寮で見かけた覚えはない。

（いったいどんな人なんだろう？）

よくよく考えてみると朝礼や始業式、終業式の類のときにも生徒会長の姿を見ることはない。司会進行はいつも副会長が行っていたし、大きな連絡ごととかも他の生徒会員達を通じているみたいだった。

（姿を現したくない理由でもあるのかな？）

姿を現したくない理由……。

（実は思いきりブスだとか？）

それはあるかもしれない……で、そんなことを考えるのは失礼だよな。本人にしかない何か重要な理由があるのかもしれないし。

「クスクス……」

「!？」

僕はハッと後ろを振り返った。しかし、僕の後ろには誰もいない。
「……？」

おかしいな。確かにさつき、後ろで笑われたような気がしたんだけど。

「……気のせいかな」

でも、前にも一度こんな風に誰かに笑われた覚えがあるんだよなあ。

誰なんだろう。僕のファンだったら大歓迎だけど、逆にストーカーとかだったら嫌だなあ。

「セシル君、そこにいたんですね」

「ロバート先生、おはようございます」

「おはよう」

ロバート先生は優しく微笑みながら挨拶を返す。

僕のクラスの担任の先生でどちらかというと存在感はあまりない。

「こらこら、心の中で事実を言うんじゃないよ」

「うわ、読まれてました？」

「そんな顔で見られたら心を探る間でもなくそう思いますよ」

ロバート先生はため息混じりに言った。

少し傷つけちゃったかな。

「ところで、少しセシル君に頼みたいことがあるのですがよろしいですか？」

「僕にですか？ かまいませんけど……」

「実は今日、ファトシュレーンに新しく実戦授業の先生が赴任してくるのですが、この間の授業で先生方はどなたも迎えに行くことができません。代わりにセシル君に行ってもらおうと思ひまして」

「全然オッケーですよ。場所はどこですか？」

「レアーダから少し南下したところにある馬車の停留所です。中央通りの停留所は見ての通り、修復にはもう少し時間がかかりますので」

「わかりました」

「まあ、軽い実戦のつもりでお願いしますね」

ロバート先生はそう言って僕に一枚のメモを渡した。

メモには新しい先生の名前と待ち合わせの時刻が書いてあった。
（女の先生なんだ。実戦の先生って言うくらいだから男だとばかり
思っていた）

戦いに慣れにくい女子へのフォローなのかもしれないな。
いったいどんな先生なのか楽しみだな。

「ようセシル、メモ紙一枚見つめてどうしたんだ？」

後ろから僕の肩を叩いてきたのはすっかりお馴染みのウエスリー
だ。

「おはようウエスリー。実はさ……」

僕はウエスリーにメモ紙を渡し、ことの経緯を話した。

「へえ、新しい先生か。何もこんな状態のときにこなくてもねえ……」

「仕方ないよ。まさかこんなことになるとは皆思ってたんだ
から」

「まあ、そうだよな。それで、いつ行くんだ？」

「へ？まさかウエスリー、ついてくるつもり？」

「当たり前だろ。男の先生だったら興味ないけど、女の先生だった
ら少しくらい興味があるじゃんか」

「はあ……」

ウエスリーの言いたいことが大体わかってきたぞ。

「断らせないぜ。学校が休みで街の店もほとんど休みだろ。やるこ
とがないんだよ」

「……素直に自室で勉強しようとは思わない？」

「思わない！」

きつぱりと断言されて、僕はこれ以上言及する気がなくなった。
まったく、こんな奴が僕と同じ大魔導士だなんて数ヶ月経った今で
もちよつと信じられない。

「……で、何でこんな大所帯になっているのかな？」

誰に言うわけでもなくつぶやく。

「いいじゃないの。何か文句あるの？」

「……ありません」

マリノちゃんに睨まれ、僕は小さくなつてそう言う。

「リプルちゃんとはかく、ノエルちゃんはマリノちゃんに強引に連れてこられたんでしょ？お店のほうは大丈夫？」

「うん、ちゃんとお母さんの了承は取ってきたから」

ノエルちゃんのお店は今も、中央通りで露天販売もしているから余計に忙しいはずだろうに。

「そうでもないよ。お店のほうは相変わらずだけど、中央通りでお菓子を買ってくれた人が何人かお店に来てくれることもあるし」

ノエルちゃんは本当に嬉しそうに話す。

「ウエスリーさんにもお世話になりました」

「あ、ああ。別に改まらなくてもいいツスよ」

ウエスリーは照れくさそうに頭を掻く。

「何をしたんだ？」

僕が聞いてもウエスリーは照れながら「ああ、ちよつとな」と言うだけだった。

「家の前に落ちてきた瓦礫を壊すのを手伝ってくれたのよ」

ウエスリーの代わりにノエルちゃんが笑顔で答える。

「まあ、そういうことだ……」

ウエスリーは咳払いをしながら言う。

何かさつきから態度がおかしいなあ。

「さつきから思ってたんだけどお……」

リプルちゃんが「ねえねえ」と次の話を切り出す。

「ギルちゃんはどうしたの？」

「そういえば、何か静かだなとは思ってたのよねえ」

マリノちゃんがきよろきよろと周囲を見回しながら言う。

「ギルバートなら今朝からずっと姿を見てないな」

「僕も……。朝食のときも来なかったし……」

「いいんじゃないの。静かにこしたことはないし」

「マリノお、そういう言い方は駄目だよ」

「ギルちゃんはいいい子だよ」

リプルちゃんが上目遣いでマリノちゃんを見上げる。

「あら、セシルさんじゃないですかあ！」

ちようど素通りしようとしていた露店から間延びした声で僕の名が呼ばれた。

「エリスさんじゃない」

「マリノさん達もこんにちは」

「こんなところで何しているんですか？」

「ほえ？見てわかりませんか。臨時購買ですよ」

「臨時購買…て、意味なくないですか？今は休校中なのに…」

「そんなことないですよ。生徒会の皆さんや先生方は使用してくださいますから」

エリスさんはそう言うてにつこりと微笑む。

ちやつかりしているというか、怖いもの知らずというか……。

「ところで皆さんはどこへ出かけるんですか？」

「ロバート先生の頼みでサント口街道の停留所まで新任の先生を迎えに」

「新任ですか？そんなの掲示板に出てましたっけ？」

「僕も今朝ロバート先生から頼まれたんですよ」

「はあ、なるほど。でも、その人数で行くんですか？」

やつぱり疑問に思うよなあ、そこ。

僕が返答に困っているとエリスさんは「セシルさんの人柄の成せる業ですね」と言っつて優しく笑った。

「ところで、少し見て行きませんか。こんな状況ですから今だけ一時的に武器防具の販売も許可されているんですよ」

「マジで!？」

「あんた、驚きすぎだろ……」

信じられないと言わんばかりに大袈裟に驚くマリノちゃんにウエ

スリーが突っ込みを入れる。

「いくらするんですか？」

店頭での金銭交渉は買い物の基本。

安く買えるものはギリギリまで値を下げさせて買うのが利口なのだ。

「うは、確かにいい武器だけどこりゃあ高すぎるぜ」

ウェスリーが手に取っていたのは魔術士用の杖だ。軽量でそれなりに材質もいいから戦いのお供にはもってこいだが…。

「この杖、街の武器屋で買ったらもっと安くつくよね？」
早速エリスさんに勝負を挑む。

「ええ。でも、しょうがないですよ。武器は本来売ってはいけないことになっていきますから。武器屋さんが休業してしまっているので皆さんにはお気の毒としか言いようがないのですが…」

ふふん、この程度ではまだ値を下げる気にはならないか。何も考えてなさそうな顔をして意外とやり手かもしれないな。

僕達は（というか主に僕が）十数分の闘いの末、何とか自分達の武器と防具を揃えることに成功した。財布の中身は何とか無事だ。

「セシルさん、意外と金銭交渉になれてらっしゃいますねえ」

「伊達に貧乏生活を何年も続けてないからね。エリスさんとはもともととお付き合いが必要なようだね」

「フフフ、望むところですよ」

このとき、仲間達は僕とセリカさんの頭上にハブとマングースの姿を見たらしい。

第7話 ドキドキ。初めてのお迎え 後編

エリスさんとの無言の戦闘を終え、レアードの入り口付近で作業をしている先生達に断りをいれてから僕達はサントロ街道を南下して馬車の停留所を目指す。と言っても、そんなに距離はないから往復で小一時間ほどの短い冒険だ。

「セシル君、時間は大丈夫なの？」

歩きながらノエルちゃんが尋ねる。

僕は持っていた懐中時計を見たが、待ち合わせの時間にはまだ間に合う時間である。

「おおーい、お前らー！」

「あれ、フレッドお兄ちゃん？」

一番に気づいたリプルちゃんが後ろから走ってくる陰を指差して言う。

「本当だ。おーい！」

マリノちゃんは走ってくるフレッドさんに向けて手を振った。フレッドさんは僕達に追いつくと、息を吐きながら僕にメモを手渡した。そのメモにはロバート先生の字で『セシル君、申し訳ない。新任の先生が来るのは南側ではなく、北側の停留所らしい。もう出発しているとは思いが、急いで北側に向かってください！』と書かれていた。

「ええー！」

「何それー！」

「そんなあー！」

僕達は思わず絶叫してしまう。いくら時間に余裕があるといっても今からきたの停留所に行くなんて遠すぎるよ。

「何かの手違いがあつたみたいなんだ。とにかく急いでいくようにとのことだ」

「わかりました！」

「わかりましたってお前、今からじゃどう考えたって間にあわねえぜ！」

「風の魔法で追い風を作りながら走れば少しは早くつく！」

僕は急いで詠唱すると、追い風という形で風の魔法を発動させた。「フレッドさんにはあたしがかけてあげますね」

「あ、ああ。ありがとうマリノ」

何かいつの間にかフレッドさんも着いていくことになっちゃったけど、今はそんなことを気にしている場合じゃない。とにかく急がないと！

「なるほど、そういうわけか…」

北の停留所に着いた僕達の理由を新任の先生は腕組みをして聞いていた。

「理由はわかったが、その中には君達の予測不足が含まれていることも忘れるな。戦いの場は常に相手との読みあいでは決着がつくのだぞ」

「は、はい…」

僕達はしょんぼりと頭を下げた。

今のやり取りでだいたいわかっていただけただろうか。

今度ファトシュレーンにやってくる新任の先生というのはバリバリ軍人肌の女性で、その思考はなんとなくギルバートを思い起こさせた。

「とにかく学校に連れていってくれ。君たちはそのために来たのだから？」

先生に言われ、僕達は終始無言でもと来た道を引き返し、ファトシュレーンへと帰ろうとしたのだが――

「せ、セシル君…」

リプルちゃんが怯えたように僕の服の端を掴む。

「い、いつの間に囲まれていたんだ？」

ウェスリーもまったく気づいていなかったようだ。

「すまん」

唐突に先生が詫びの言葉を入れた。

「停留所で君達を待っている途中に囲まれたことに気づいてはいたが、どうせなら君達の実力をこの目で確かめようと思ったのだ。噂の事件以来、ファトシユレーンは集団戦闘もカリキュラムに含まれているのだろうか？」

「おいおい、冗談きついな……」

フレッドさんが頭を掻きながらつぶやく。

「さあ、君達の実力を見せてもらおうか。私はここでじっくり見物しているでしょう」

先生はそう言つと、円のちょうど真ん中にどっかりと座り込んでしまった。

「ちよつとお。マジで勘弁してよ……」

マリノちゃんが泣きそうになりながら言う。でも、こうなつては今更泣いても遅すぎる。

だったらやるしかない！

僕は新しく買った剣を抜き、素早く剣に雷を付加させる。剣先を少し当てるだけでも剣全体に帯びた雷が野盗達のダメージを与える。

「ブレイズサークル！」

「ロツキーアイス！」

ノエルちゃんの円状の炎は地面と接触した瞬間に、その場で勢いよく炎を吹き、ウェスリーの氷は空中からあられの様に降り注ぎ野盗達を上手く蹴散らしている。

「せえーの、浮き上がれー！」

浮遊魔法が得意なマリノちゃんは敵を浮かせて同士討ちにする作戦を取っているようだ。これにより、もし敵に囲まれても一人を盾にして攻撃することができる。

リプルちゃんは主にダメージの回復や僕とフレッドさんの補助に

徹している。

特訓しているときは全然気がつかなかったけど、僕達つてすごくバランスが取れたパーティになりつつあると思う。

本当ならこれにギルバートが加わり中距離からの攻撃をしてくれるようになる。しかし、これでもバランスは十分だ。敵の弓攻撃も距離を選ばない魔法ならその持ち味を発揮できない。

僕達はすぐに野盗を追い払うことに成功した。

「ふう、何とかなったみたいだな」

フレッドさんが逃げていく野盗を目で追いながら息をついた。

「先生、怪我はありませんか？」

僕は戦闘中ずつと戦場のだ真ん中で座っていた先生に声をかけた。

「見てのとおりだ。それよりも…」

先生はチラリと自分の腕時計に目をやった。

「七分四十秒というところか。六人であの人数を撃退するにはもう少し時間が短いほうがいいな」

先生は安堵している僕達に向かってそんなことを言った。

「とりあえずよくやった。さあ、先を急ぐとしよう」

先生はそう言つと、僕達に背中を向けて一人さつさと歩いていってしまった。

「な、何かム力つくんですけど…」

「とても厳しそうな先生だね…」

マリノちゃんとノエルちゃんが率直な感想を述べる。

「あゝあ、女の先生つて言うから期待していたのになあ」

ウェスリーの感想は論外として。

「しかし、あの先生は相当な実力者だな。俺、戦いの合間に座っている彼女を見ていたが、奴らは彼女の眼力に怯え近づこうともしなかった」

「たまたまそう見えただけじゃないんですか？ 闘う相手は僕達だったわけだし」

「あの先生も最初に言っていただろう。奴らは自分を狙っていたっ

て。襲う目標が変わって、かえって狙いやすかったはずなのに、
かわらず狙わなかったのはあの人がそれなりの威圧感を持っている
ということだよ」

フレッドさんはやけにあの先生のことを褒めているな。やっぱり
騎士同士でわかりあえるものでもあるのかもしれない。

「おい、置いていくぞー！」

はるか向こうで先生が叫んでいる。

「しょうがない。もう怒られるのは勘弁だからさっさと行こうぜ」
ウエスリーがやれやれといった表情で走り出した。

「うゝん、なんか忘れているような気がするんだけどなあ……」

「どうしたのマリノちゃん？」

走りながら尋ねると、彼女は首を捻って「何か忘れてない？」と
問いかけた。

「何も忘れてなんかないと思うよ。マリノちゃん、何か落としたり
したの？」

「そうじゃないんだけど……んゝ」

マリノちゃんは走っている間中ずっと首を捻りっぱなしだった。
いったい何を思い出そうとしているのだろう。

僕にはわかるはずもなかった。

第8話　小さな温もり　前編

「ああー、思い出したあー!!」

新任のルイ先生を職員室まで送り届けてすぐ、さつきまでずっと何かを忘れていたとブツブツつぶやいていたマリノちゃんが唐突に叫んだ。

「わわっ!!」

「びつくりしたあー!!」

僕達は急に大声を出したマリノちゃんに驚きながら、何を思い出したのか尋ねた。

「誕生日よ!!」

「誕生日?」

「誰の?」

僕とノエルちゃんは揃って首を傾げる。

「フレッドさんのだよ!!今日、七月三日でしょ!??」

「七月三日がフレッドお兄ちゃんの誕生日なんだあ」

「それは知らなかったな」

リプルちゃんとウエスリーはあくまで平静とした顔で言う。

「もう、リプルちゃんもウエスリーもそんなのんびりしていいの!??」

「はあ?他にも何かあるのか?」

きょとんとした顔で尋ねるウエスリーにマリノちゃんは苛立ちながら「誕生パーティをやらなきゃ!」と大声で答える。

「パーティメンバーの大事な誕生日なんだよ!盛大にお祝いしてあげるのよ!」

「そんなもんか?別に普通に祝ってあげれば…」

言いかけるウエスリーの肩を僕はそっと叩く。

(実はマリノちゃんは…)

（え？マジで？）

ウェスリーは意外だと言わんばかりの表情でマリノちゃんを見つめる。

「と〜にか〜く〜！今日の夜はフレッドさんの誕生パーティーよ！」
マリノちゃんは大勢の前だというのに顔を赤らめながら大声でそんなことを叫んで、職員室から出てきたルイ先生にお仕置きを受けるのだった。

かくして、フレッドさん誕生パーティーの準備をすることになったわけ。

「とりあえず私は家に戻ってお祝い用のケーキを焼いてくるね。リプルちゃんも手伝ってくれる？」

「はい！」

そんな流れで、まずは誕生パーティー用のケーキ係にノエルちゃんとリプルちゃんが抜擢。

「ところでルイ先生に連れていかれたマリノちゃんは？」

リプルちゃんに尋ねると、彼女は可愛らしく首をかしげて「わからない…」と答えた。

「大方、誕生日のプレゼントでも急いで買いに行っているんじゃないか？」

「ありえますね。それかもしくは…」

ノエルちゃんは思い当たることでもあるのだろうか。小さな笑みをこぼすと、リプルちゃんを連れて帰ってしまった。

二人、残されてしまった僕たちなのだが…。

「どうする？」

「とりあえず誕生パーティー用の会場を探そうよ。会場がなければきかないし」

「そうだな。ついでにグッツ先生とセリカ先生くらいには声をかけておくか？あの二人とフレッドさんは仲がいいみたいだし」

「そうだね」

僕達は再び、職員室へと戻った。

グラッツ先生とセリカ先生は共に忙しそうにしていたが、この話を聞くとすぐに快く出席してくれた。

「それで何時からどこでやるの？」

「それが、マリノちゃんの思いつきでここまできたもので、まだ何一つ細かいことが決まっていけないんです」

セリカ先生の問いに苦笑しながら答える。

「じゃあ、今から三時間くらい時間をもらえないかしら。パーティにはお料理が欠かせないでしょ。私がそっちを担当してあげるわ」

「本当ですか！ありがとうございます」

「グラッツ先生もお手伝いしていただけますか？」

「は、はい！喜んでお手伝いさせていただきますー！」

そういえばこの二人もそういう関係だったわけ。まだグラッツ先生の一方通行だけど。

「今から三時間だと六時を少し回るくらいか。多めに見て、パーティの時間は七時からってところか？」

ウェスリーの計算に僕は小さく頷いた。パーティ用の会場もグラッツ先生が何とかしてくれると言ってくれたし、料理もお菓子もプレゼントもオツケーだ。あとはノエルちゃんにこのことを回して伝えてもらって、と。

僕は念話でさっきまでの旨をノエルちゃんに伝えた。

ずいぶん特大のケーキを作っているようで、そのくらいでちょうどいい時間になる

と言っていた。

「あとは会場の飾りつけだね」

「ああ。それよりお前、一人大事な奴を忘れてるんじゃないか？」

「ギルバートだろ。大丈夫、今から寮に戻って伝えてくるから。その間にウェスリーはフレッドさんにパーティのことを伝えてきてくれ。くれぐれも誕生パーティだと悟られないように頼むよ」

「任せときなつて」

ウェスリーはバチッとウィンクをすると、寮に戻る僕と別れた。寮に戻った僕はギルバートの部屋の前に立った。

（そういえば、今朝からずっと姿を見なかったけど、体調でも悪かったのかな。もし、そうなら無理に誘わないほうがいいかな？）

しかし、一応この催しのことは伝えておかないといけないだろう。僕はやや控えめに部屋の扉をノックした。

「誰だ…」

しばらくしてから、相当機嫌の悪そうなギルバートの声と共に扉が開いた。

「や、やあギルバート」

その面持ちに思わず声がすばんでしまう。

「セシルか…。何の用だ？」

「あ、えっと、実は今日フレッドさんの誕生日でパーティをするこ
とになったんだ。皆来るから、もちろんギルバートにも来てほしく
て…」

「すまんが、それには行けないだろう…」

「どうして？」

「いろいろと理由があるのだ。フレッドにはすまぬと言っておいて
くれ…」

ギルバートはそれだけ言うと、静かに扉を閉めてしまった。

いったいどうしたというのだろう。かなり気になりはしたものの、
彼の出欠を確かめるという目的は果たしたので、次の準備に当たる
としよう。

僕は一度、自分の部屋に戻りあったけの折り紙やのり、はさみ
などを持ってウェスリーと合流した。

「よう、ギルバートは来るのか？」

「それが、これないみたいなんだ」

「何で？」

「何でって言われても理由も話さずに扉を閉められちゃったし、何
か思いつめた表情をしていたし…」

「ふん…」

「フレッドさんのほうはどうだったんだ？」

「こっちも微妙な感じだなあ。警備員室に行ったはいいもののフレッドさんがいなくてさ。代わりにもう一人のおっさんがいたからその人に聞いてみたら、フレッドさんは仕事があつて夜七時にはギリギリ終わるらしい」

「ギリギリ…か」

「一応、おっさんにフレッドさんに言付けをしてくれるようには頼んだから大丈夫だとは思うんだが」

「そっか…」

「おいおい、お前がしょげてどうするんだよ。まだこないと決まつたわけじゃないんだ。頑張っているマリノのためにもこっちも気合入れて会場設営しようぜ」

僕の肩をポンと叩くウェスリーに僕は小さく頷いた。

太陽もすっかり西に傾き、暗くなりつつある午後六時半。

僕達はフレッドさん誕生パーティの会場である多目的教室でそれぞれの仕事に当たっていた。

ケーキも無事に到着し、ノエルちゃんとリプルちゃんも会場設営に当たってくれている。

「こっちの飾りつけは済んだよー！」

「正面はこんな感じでいいかなあ？」

「オッケーオッケー！」

会場の飾り付けをざっと見渡したウェスリーがオッケーサインを出す。

「何とか飾りつけは間に合ったな」

「セリカ先生の料理も、もう少しで全部運び終えるらしい」

僕とウェスリーはコの字型に並べられたテーブルに並ぶ色とりどりの料理が目が釘付けになっていた。そして、その中心にはノエルちゃんトリプルちゃんが作ってくれた大きな誕生日ケーキ。

マリノちゃんの情報によるとフレッドさんはチョコレートが好きらしく、ケーキはデコレーションたっぷりのチョコレートケーキだ。「誰かの誕生パーティをやるなんて何年ぶりだろうなあ」

「そうだね。いつの間にかすっかりそういうことってしなくなっちゃったよね」

ノエルちゃんとケーキを眺めながらそんなことを話す。

「おおーい、料理も完全に運び終えたぞ！」

グラッツ先生とセリカ先生が最後の料理をテーブルに並べ終えて、僕達のところにやってきた。

「ご苦労様でした」

「セシル君達も」

「そういえばマリノはどうした？もうすぐ時間だというのに……」

グラッツ先生が準備中から姿の見えないマリノちゃんのことを尋ねる。そのついでに料理のつまみ食いをしていたウエスリーがお仕置きされたことも一応付け加えておこつ。

「うまくいってないのかなあ……」

「そんなことないよ！」

ノエルちゃんが大きく首を振りながら言う。

「マリノは絶対に間に合う！絶対に！」

「ノエルちゃん……」

「おおーい、遅くなってごめーん！……」

七時三分前、猛ダッシュしながら今日のもう一人の主役がやってきた。

「皆ごめんね！何も手伝えなくて……！」

「いいの。それよりもマリノのほうこそ大丈夫なの！？」

「へへー」

マリノちゃんは照れ笑いをした後、僕達にブイサインをして見せた。

よし、これで全員揃った。あとはフレッドさんがここに来るのを待つだけだ！

時計の針は刻一刻と時間を刻んでいく。
七時まであと五秒。

四

三

二

一
……。

第8話　小さな温もり　後編

「……………」

僕達は黙ったまま教室の入り口を見つめていた。

七時は過ぎたというのにフレッドさんがやってくる気配はない。

「アハハ、しょうがないよ！フレッドさん、仕事があるんでしょ？
もう少ししたら来るよ」

マリノちゃんは笑いながら、じっと時計を見続けていた。しかし、
八時になってもフレッドさんがくる気配はなかった。

僕はウェスリーの元に歩み寄った。

（本当にフレッドさんにこの話が伝わっているのかな？）

（な、何だよ！俺のせいだって言うのかよ！？）

（そうは言っていないだろ！ただ、あまりにも遅すぎるからさ…）

僕は心配になってマリノちゃんのほうに目をやった。

まだ彼女は黙って教室の入り口を見続けている。

「……………」

八時五十五分。

もうすぐ九時になる。

僕達の心も料理もすっかり冷えきっていた。

「みんな…」

ずっと入り口で待っていたマリノちゃんが僕達のほうを向いて口
を開いた。

「今日はあたしの無理矢理な提案に付き合ってくれてありがとね。

でも、今日はフレッドさん来れなさそうだし、もう終わりにしよう」

「マリノ、まだ、まだ待とうよ…」

「フレッドお兄ちゃん、絶対来るよ！」

ノエルちゃんとリプルちゃんが必死にマリノちゃんを説得するが、
彼女は小さく首を横に振るだけだった。

「いいんだ、もう…」

そうつぶやくマリノちゃんの笑顔はとっても悲しかった。

本当に、本当にこのまま終わっていいの？

「さあ、片付け……」

「おおーい！！」

『！？』

マリノちゃんがパーティの終わりを宣言しようとした瞬間に聞こえた誰かの声。

僕達が全員知っている声。

いつも僕達を笑顔で見守ってくれている暖かい人……。

「はあ、はあ……。間に合った……」

『フレッドさん！！』

教室の中に再び光が灯った。

「こんなに遅れてしまつて本当にごめん！今、仕事が片付いて警備室から飛んできたんだ」

それを証明するように、フレッドさんの腰にはまだ剣と槍が装備されていた。

「大事なパーティと聞いたんだ。俺に是非来てほしいものだって……」

フレッドさんは乱れた息使いを何とか整えながらそれだけ言つた。

僕達はうれしさのあまり、しばらく頭がフリーズして何も言えなかったが、やがて我に返ると――

『ハッピーバースデー、フレッドさん！！』

リプルちゃんを筆頭に全員が持っていたクラッカーを盛大に鳴らした。

「え、ええ！？み、皆どうして今日が俺の誕生日だと知っていたんだ？」

呆氣にとられた顔でフレッドさんがつぶやく。

「フレッドさんも隅におけないよな。誕生日を覚えてくれていた女の子がいるなんてさ」

ウェスリーが早速茶化しに入る。その目線の先は――

「マリノ？まさかお前が……？」

「フレッドさんがいつか他の女の子達と話しているのを聞いて…その」

マリノちゃんはすっかり小さくなってフレッドさんと話している。「そうだったのか。嬉しいよ、マリノ。俺の誕生日を覚えてくれてただけでなく、こんなことまでしてくれるなんて。今日は最高の誕生日だよ!」

「いいや、まだだね」

ウエスリーが指をふりながらニツと笑う。ノエルちゃんとリプルちゃんもクスクスと笑う。

「実はマリノはフレッドさんのためにとっておきの手品を用意してあるんですよ」

ね?と、ノエルちゃんは微笑みながらマリノちゃんに言う。

「それじゃセシル君、音楽をお願いします」

「了解」

僕は教壇の下に隠してあった魔動レコーダーのスイッチを入れた。

踏会などで聞くようなワルツが流れ、あらかじめ決めておいた魔法の照明に切り替わる。

マリノちゃんが両手をふっと持ち上げると、彼女の手のひらの上から小さな男の子と女の子の人形が現れる。二人の人形はそのまま空中でワルツに合わせたダンスを踊り、とっても優雅な時間を過ごしていた。

二回目のターンを決めたとき、ふと女の子が指にしていた指輪が音を立てて床に落ちてしまった。女の子は慌ててそれを拾いに向かい、男の子はそれを追いかける。

指輪はちょうどフレッドさんの足元に落ちてきた。

フレッドさんはそっと、その指輪を拾う。目の前には落とした指輪を拾ってくれたフレッドさんを見上げる女の子の人形。

「はい、落し物」

フレッドさんは女の子に優しく指輪を返した。

「……」

女の子はしばらく返してもらった指輪を見下ろしていたが、やがてその指輪をフレッドさんの手の上にそっと乗せた。女の子は一步、後ろに下がり、男の子と一緒に笑いながら虚空へと去っていった。

ワルツが終わり、照明ももとの物へと切り替わった。

フレッドさんは手品を終えたマリノちゃんに最後まで温かい拍手を送った。

「すごいよマリノ。俺、すごく感動したよ」

「その指輪はこの手品を見てくれた貴方へのささやかなプレゼントです。貴方にこれからも幸運が舞い降りますよう……」

マリノちゃんは言い終わり、丁寧な頭を下げる。今度は僕やグラツツ先生達、皆から拍手を受けた。

マリノちゃんの手品をフレッドさんへの誕生日プレゼントは、無事に終了したのだった。

誕生パーティーが終わり、片付けはセシルたちに任せて二人は校舎の外にいた。

「いやぁー楽しかったなあ。セリカ先生のお料理もノエルたちのケーキも最高だったよ。お前の手品もな」

フレッドは優しく微笑み、マリノの頭をそっと撫でる。

「レアドにきてから自分の誕生日なんて祝ったことなかったけど、こうしているいろいろしてもらえると、やっぱり嬉しいものだな」

「本当にそう思ってくれました？ 迷惑だ何て思いませんでした？」

「おいおい何を言うんだよ。嬉しかったぜ、本当に。」

「……ありがとう」

フレッドの目に嘘はなかった。

彼は二十六回目の誕生日を心から楽しんだ。

「いい星空だなあ。明日も綺麗に晴れるぞお」

フレッドは星空を見上げながら大きく伸びをする。

「あの、フレッドさん！」

マリノはやっとの想いで声を絞り出した。

「うん？」とフレッドがマリノのほうを振り返る。

「あたし、今日の手品がちゃんと成功したらフレッドさんに言おう
と思っていたことがあるの……」

「俺に？何だい？」

フレッドはまだ気づいていない。

この少女がこれから何を言おうとしているのか。

自分の気持ちに決着をつけなければいけないときがきていること
に、まったく気づかずマリノの言葉を待っていた。

「あたしは……フレッドさんのことが——」

「フハハハハ！どけどけーい！！」

ドガッ！

音で言うところとちょうどこんな感じだろうか。

マリノは後ろから走ってきた物体に思いきり弾き飛ばされた。

「フレッド！セシルから聞いたぞ！今日は貴様の誕生日だそうだな」

「あ、ああ……」

「ならば貴様にこれをやろう。使い古しの品だが、まだまだ使い勝
手はいいはずだ」

ギルバートが渡したのは両端のたまがやたらとボロボロなダンベ
ルだった。

「騎士の貴様には手ぬるいかもしれないが、意外と侮れないものだ
ぞ！」

「は、はあ……そりやどーも」

「何だ？反応が悪いな。気に入らなかったか？」

「い、いや、そうじゃなくて……」

フレッドが何か言おうとすると、弾き飛ばされたマリノが怒りを
あらわにして立ち上がった。

「しええーい！！」

「ふぐう！？」

マリノの不意打ちアツパーを受け、地面に倒れるギルバート。

「もう！あんたのせいで気分が台無しじゃないのよ！」

「な、何のことであるか！？」

「問答無用！こうなったらケツ魔法百発当てるまで逃がさないわよ！」

「ぬおお！それだけは勘弁してほしいのである！」

「待たんかワリヤー！」

マリノはそのままギルバートにケツ魔法百発を実行するためにフレッドを置いて走り去ってしまった。

フレッドはその様子を啞然とした表情で見っていたが、やがてフツと口元を緩めてつぶやいた。

「ありがとうマリノ。お前の気持ちは、すごく嬉しいよ」

第9話　喧嘩上等！続・ギルバート奮闘記　前編

ヴァイス襲撃から今日で一週間が経過した。

ファトシュレーンの人達も、そして街の人達も再び奴らが攻めてくるのではないかと戦々恐々としていた。

去り際に残っていたヴァイスの言葉が思い起こされる。

『今日はこのくらいで帰るとするか。このくらいやれば様子見には十分でしょ』

様子見。

つまり、あの攻撃でさえあいつにとってはまだまだ序章なのだ。

本当の恐怖はこれから始まるのかと思うと、夜も眠れない。

生徒会で相当な実力者である寮長さんの攻撃をも軽々と防いでいた奴に勝てる術などあるのだろうか。

僕達がいくらレベルアップしてもやっぱり奴には勝てないんじゃないだろうか。

不安が頭の中をたくさんよぎっていく。

サンサンと照りつける真夏の太陽が、とてつもなく怖かった。

そつえば世界史の授業で習ったことがある。どこかの国が戦いに敗れた時の朝も地面を太陽が地面を焼き尽くすように照りつけていたらしい。

レアドもそうならないといいのだが――

「大丈夫か、セシル？」

よほど顔色が悪かったのか。僕の顔を心配して覗き込んできたのはウェスリーだ。

「おはようウェスリー」

「おはようさん。気持ちはわかるが、あんまり変なことを考えすぎないようにしろよ」

「え？」

「お前は若干神経質だからな。ま、この状況じゃ無理もないけど」
ウェスリーはそう言つと「飯だ飯だ」と言いながら廊下を歩いて行つてしまった。

「……君がうらやましいよ、ウェスリー」

僕は彼の背中に向けて素直な感想をつぶやいた。

朝食を食べ終えた僕はウェスリーと二人で自室に戻る廊下を歩いていた。

「そういえば今日もギルバートを見なかったな」

「もう四日も自室にこもりっぱなしだ。フレッドさんの誕生日の時には一応プレゼントを持ってきたみたいだけど」

「あれは正直言つて邪魔だったよなあ。せつかくのラブシーンを……」

「うん……。でも、パーティのリーダーとしてはホツとした感じだよ。もしマリノちゃんが振られて今後の関係が悪くなると、特訓にも影響が出てくるだろうし」

「いくら元気なマリノでもそれだけは怖いところだよな」

「うん……。マリノちゃんの性格からそれはないってわかつてはいるけどね」

「お前は、マリノのことを信頼しているんだな」

「もう三年近い付き合いだからね」

「あゝあ、俺にもそんな可愛いライバルがいればなあ……」

「またウェスリーの悪いくせが始まった。そんなのは——」

「納得がいかん——！」

「うん？今の声はギルバート……？」

「そつだ、納得がいかん！」

「静かに！」

僕はウェスリーの口を強く押さえると、階段の影に隠れた。

そつと影から覗いてみると、廊下の向こうにはギルバートともう一人。

（ダイゴ先生？）

また奇妙な組み合わせだなと思いつつ、僕達はそのやり取りを覗いてみることにした。

「ダイゴ殿！どうして我輩だけこんな目に遭わねばならないのだ！せつかくの休学期間、セシルたちと特訓に明け暮れようと思っただのに！」

「特訓も大事だが、お前には勉強も大事だ。編入生として入ったからにはもうすぐ行われる期末昇級テストで最低一ランクは上がってもらわないと困る！初級魔術士ランクだから降級や降格はないが、現状維持では困るのだ！」

「そんなことは知ったことか！我輩はここに賢者になるためにやってきたのではない！我が母校の教官殿の命を受け——」

「その命が何だか知らないが、ここにきた以上はファトシュレーンの生徒としての振る舞いをしてもらわないと困る！郷に入っては郷に従えと言っ言葉もあるだろう！」

「だからといってここ数日、ずっと男性教員の指導を一日中受けるいわれなどどこにもないわ！」

「そうしなければお前の成績では現状維持になってしまうからだろうが！」

こりゃあすごいな。

ムサイ男同士の見事な口論。見ているこっちが何だか暑くなってきたしまう。

（それにしても…）

ギルバートはここ数日、ずっと部屋にこもりきりだったのは先生たちの個人授業を受けていたからなのか。どおりでフレッドさんの誕生日のことを伝えにいったときも機嫌が悪かったわけだ。そしておそらく、扉越しに喋る彼の後ろにはいずれかの男性教員がいたのだろう。だから長く話することができなかったんだ。

一日中みっちり勉強漬けか。一人で自主的にやるならまだしも、先生の監視の元でやるのは、そりゃあ嫌にもなるよなあ。

「ええーい、このまま言い争っていても拉致があかん！ダイゴ殿、

ここは一つ賭けにて勝負を決しようではないか！」

「賭けだとお!？」

ダイゴ先生の語尾が上がる。この時のダイゴ先生はよく眉を吊り上げる習性がある。おそらくこめかみには血管が浮き出ているに違いない。

「我輩と一対一の果し合いをして、我輩が勝てば以後は自由に！ダイゴ殿が勝てば今までどおり教官たちの個人授業を受けようではないか！」

「ギルバート、貴様……」

いくらなんでもそれはまずい。

学校の教師が生徒と賭け事なんて許されるはずがない。

ダイゴ先生もてつきりギルバートにお仕置きをして、その提案を跳ね返すと思っていたのだが――

「ふん、よかるう。その果し合い、受けてたつわ！」

受けちゃった……で、教師が生徒の挑発に乗って賭けなんかしていいのかよ!？

「十時にコロシウムでどうだ!？」

「受けてたつ！ダイゴ殿、我輩に挑戦したことを後悔させてやるぞ！」

「その言葉、そっくりそのままお前に返してやろう！」

双方の間にバチバチと熱い火花が飛び散る。

「こりゃあ、おもしろいことになってきたな」

すっかり今のやり取りを聞いていたウェスリーが含み笑いをしながら面白そうに言った。

「何が面白いものか！こんなくだらない賭けはやめさせなきゃ！」

「いいじゃねえか。もうあの二人の間で決まっちゃったことなんだし」

「でもさ……」

「気になるなら俺達も見に行ってみようぜ。十時からだからもう少

し時間があるな。マリノ達にも念話で誘ってみようぜ」

ウェスリーはそう言って楽しげにマリノちゃんに念話をかける。

ああ、まったくどうなっちゃうんだろ…。

僕の心配をよそに、時間はゆっくりと決戦のときに近づいていった。

第9話　喧嘩上等！続・ギルバート奮闘記　後編

約束の十時。

僕はいつの間にかいつものメンバーと一緒にコロシアムの観客席にいた。

僕の横には――

観戦用の缶ジュースを購買で買って飲んでいるウエスリー。

これから面白いことが始まることに期待いっぱいマリノちゃん。先生とギルバートの両者を心配そうに見下ろすノエルちゃん。

試合前にお仕置きの鉄拳（？）　をギルバートに食らわせておきながら、興味津々な顔のリプルちゃん。

ノエルちゃんを誘ったときに、たまたまその場に居合わせたラウナちゃん。

観戦メンバーだけで見ても、何とも奇妙だと思う。

「ギルバート、もう一度約束を確認するぞ！私がこれに勝てば、お前は本当に大人しく先生方の授業を受けるのだな？」

「愚問だ。ダイゴ殿こそ、負けたときの覚悟はよろしいな？」

「そういうことは勝ってからいくらでも言うことだ、ギルバートお！」

いよいよ試合が始まった。

両者が闘技場を同時に蹴って走り出す。

「ちょーっと待ったー！！」

二人が激突する瞬間に突如割って入ってきた謎の飛行物体。乗っていたのは――

「グラッツ先生！」

「ドクターエックス！？」

ああ、またこの二人か。

この二人が一緒にやってくるというもろくなことがないような気がする。

「教師の職務を忘れ、生徒との挑発に乗ってこのようなことをしでかすとは怠慢じゃのお、ダイゴ先生」

「ドクターエックスにグラッツ先生！職務に逆らった始末は覚悟の上です！ですのでここはお引き取りください！」

「ダイゴ先生、俺とドクターは何も先生を責めに來たわけじゃないんですよ」

「！？」

「せっかくこのようなしかるべき舞台が整っておるし、よく見ればあそこに我が研究の実験生もおる」

「げ、やっぱり僕達のほうに目をやってる。」

「そこでじゃ、何も一対一の果し合いにせんでもよからう。ダイゴ先生、よければお主も一緒にワシの実験に付き合ってくれぬかのお。その代わりと言っては何じゃが、始末のことはできる限りフォローしてやるう」

「やはりそういうことか。ドクター、貴方が交換条件を出すときはいつも嫌な予感がします」

「フォッフォッフォ、受けるかどうかは先生しだいじゃ。ま、向こうの実験生達に拒否権はないがの」

「ええー！」

「そんなのありかよお！」

マリノちゃんとウエスリーがブーイングを飛ばすが、ドクターエックスは相変わらず自慢の顎鬚を弄んでいる。

「いいでしょうドクター。ここまできて後には退けませんからな」

「そうこなくっちゃ！」

グラッツ先生はパチンと指を鳴らしてドクターの飛行物体から闘技場に降りた。

「グラッツ先生、何のつもりだ？」

「何のつもりってこういうつもりですよ」

グラッツ先生の斧がキラリと光る。

「俺はあの子達に賭けているんです。だから負けないうちにしごい

てあげるんですよ」

「…勝手な理屈だ」

ダイゴ先生は呆れたように肩をすくめるが「邪魔だけはするなよ」と言って再び戦いの舞台に立った。次いでドクターエックスが作り出した魔物達が次々と闘技場に現れる。

「何をボサつとしておる！お前たちも早く戦場に向かわんかい！」

「はうう、結局こうなるんですかあ」

「シュン…。嫌だなあ…」

ノエルちゃんとリプルちゃんは深いため息を吐く。

「ウェスリー、後できつちりこの埋め合わせをしてもらってからね」

じつとりとした目つきでウェスリーを睨むマリノちゃん。

（はあ、結局いつものパターンか）

戦場に立ちながら、そんなことを思う僕。

「仕方ないです。行きましょう、セシルさん」

もはや観念したようにつぶやくラウナちゃん。

「では、試合開始！」

ドクターエックスの合図で試合が再開される。

ダイゴ先生は魔物たちのガードの後ろにいる。脇には斧を構えて待っているグラッツ先生。

しょうがない、やるしかないか。

今回は前衛が僕とギルバートに加えてラウナちゃんがいてくれるから多少は心強い。

だけど油断は禁物。突進し過ぎないように注意しないと。

まずは僕のライトニングアローで魔物を牽制。

今回から加わったエスカルやサントロ街道の狼たちもいる。

全部弱点が違うからいちいち魔法を付加するのは得策ではない。ここは動きを鈍らせる補助系の魔法を付加したほうがいいだろう。

「シャイニングフォース！」

後ろから強力な光の波動が闘技場に降り注ぐ。

「今のは…」

ノエルちゃんが放った魔法のようだ。

「魔法力を波動にして放つときに目くらましの魔法を合成してみたの！しばらく魔物達の視界は悪くなっているはずよ！」

「サンキュー、ノエルちゃん！」

よし、これで物理攻撃があてやすく……。

「ニユートライザー！」

魔物達の奥から聞こえた太い声。

ダイゴ先生の異常回復の治癒魔法か！？

「甘いハミルトン！付け焼刃の状態異常程度、何度でも治癒してやるぞ」

ダイゴ先生はもともと保健体育科目の先生。治癒魔法にもかなり精通していたことをすっかり忘れていた。

「ピギヤア！」

「ぬお！」

「うわあ！」

僕達のそばに近づいてきたエスカルがいきなり酸の混じった粘液を吐き出す。

「普通のエスカルなのに酸を吐いた！？」

「ドクターの強化改造のせいかな！」

僕達は次々と前に出てきたエスカルの酸攻撃を必死でよける。

「うっとおしい！バーンフレアー！」

炎系魔法、バーンファイアの爆発の範囲を広めた魔法でエスカルを一掃する。強化されても弱点までは補強しきれなかったようだ。「フハハハ、狼など我が銃の的にしかならぬわ！」

素早い狼のスピードもなんら苦にすることなくギルバートは銃で次々と狼を撃ち落とす。ラウナちゃんの刀裁きも少し見ないうちにまたキレが出てきている。

そろそろ魔物の群れも終わりだな。徐々にグラッツ先生とダイゴ先生の姿が見えてきた。

（この間のようにはやられないぞ……！）

僕は一瞬後ろを振り返り、後衛の四人に指示を出した。

「ひたすら防御魔法で防御を固めるんだ！あの大斧と刀は手ごわい！」

「オッケー！」

「補助なら任せてよ！」

補助系魔法が得意のマリノちゃんトリプルちゃんが物理・魔法・回避の全ての防御と補助の魔法を僕達にかけた。

「なるほど、この前みたいにすぐにやられないようにするための作戦か。でも、残念だったな。魔法の防御膜を打ち消す魔法を習得している俺には無意味……だばあー！！」

ドゴォン！

グラッツ先生に特大級の雷が落ちる。

「あらあら、こんなところにいらしたんですねグラッツ先生」

闘技場の出入り口からひよっこりと顔を出したのはセリカ先生だった。

「グラッツ先生、駄目ですよ。仕事をサボってこんなことしてちゃ」

セリカ先生は倒れるグラッツ先生に向かってメットと人差し指を立てるが、指を差されている本人は気絶してピクリとも動かない。

「それじゃダイゴ先生、失礼します」

「あ、ああ……」

セリカ先生は浮遊魔法でグラッツ先生を持ち上げると、笑顔のまま闘技場を去っていった。

ダイゴ先生は何を言われるのか内心冷や冷やしていたようだった。

「い、いったい今のはなんだったのだ？」

「さ、さあ……」

何だったんだろう、と言いかけて僕はハッと気がついた。

「今のうちだー！！」

僕の声にハッと我に返るダイゴ先生。しかし、その頃には僕達全員が放った魔法がダイゴ先生に集中放火していた。

「みぎやー!!」

情けなく、そして奇妙な悲鳴をあげて華麗に宙を舞うダイゴ先生。
ありがとうダイゴ先生。

先生のことは一生忘れません。

「つまり、ここにこの式を代入すればいいわけだ」

「なるほど…。これでいいのか？」

「何やってるんだよ。全然違うじゃないか。こんな簡単な術式も解けないのかよ」

「うぬぬ、面目ない…」

戦い終わってギルバートの自室。

は黒焦げになったダイゴ先生の処理をドクターに任せて、僕とウエスリーはギルバートに勉強を教えていた。

「これで正解か、ウエスリー？」

「そうそう、それで……で、何で途中式があっているのに答えが違うんだよ」

「なぜだあー!」

「こつちが言いたいわ!」

まるで漫才のような会話をしながら問題を解く二人。
こんな状態で本当に昇級試験は大丈夫なのだろうか。

「これでどうだ!」

「ぜんっぜん、ちげえー!!」

こりゃあ、しばらくは特訓よりもギルバートの勉強に専念したほうがいいかな。

第10話　冷めたホットミルク　前編

夜のファトシュレーンの校舎を僕は急いで走っていた。

今の時間なら街の何でも屋がギリギリ空いているはずだ。とつくに寮の門限も過ぎているから急ぎつつも、先生達に見つからないように学校を抜け出さないと。

そもそもなんでこんな時間に街に買い物に行くかというところ、今日の朝まで話は遡る。

ギルバートがまたもや、あるうことが先生と対立してしまったため、コロシウムで決闘をする形になってしまったのだ。それだけだったらよかったんだけど、そうはいかないのが僕の運のなさがなせる業だ。ドクターエックスの提案で、むりやり魔物も含めた集団戦を仕組まれてしまったのだ。戦闘自体は何とか押し気味に進め、最後は僕たち全員の魔法集中砲火で決着がついて、ギルバートは無事賭けに勝ち、先生方の個人授業は避けられたわけだが、それではやはり期末が不安だということとひそかにセリカ先生を通して僕とウエスリーでギルバートの勉強を見てあげることになったのだ。といっても、ほとんどウエスリーが付きつきりで教えているので、どちらかというと僕はあまり出番がなかったりする。そこをウエスリーに指摘され、暇があるなら夜食でも買ってこいと言われて今に至る。それにしてもウエスリーの無茶振りにも困ったものだ。夜もだいぶ更けてきているというのに夜食を買って来いだなんて。そもそもこんな時間に店が空いているわけじゃないか。あの時は僕も場の雰囲気が出てきてしまったけど、今こうやって走っている途中でそのことに気づいたのだ。

（何でも屋さん開いていますように）

僕は何とか校門を抜け、夜の街へとくりだした。

幸い、店は閉店ギリギリだったため売れ残っていた安い菓子パンなどを適当に買って店を後にした。

（あれ？）

街から学校に戻る途中で、小さな影を見かけた僕は反射的にその場に隠れた。

あの影の大きさから先生でないことはわかっているが、念のためだ。

（あれは……リプルちゃん？）

ポニーテールの影ですぐに彼女だということがわかったが、どうしてこんな時間にあの子が街をうろついているんだろう。僕のように夜食を買いにきたわけではないだろうし……。

よくよく見ると、彼女は出納のようなものを首からぶら下げていた。

（少し気になるな……）

僕は心の中でウエスリーとギルバートに謝辞を入れると、リプルちゃんが通っていった道を同じようにつけていった。

リプルちゃんが向かった場所は――

（教会？）

何でまたこんな時間に教会に行くんだ？

僕はこれ以上追ってよいものか考えたが、ここまで来ておいて今更帰るわけにも行かなかったので五分ほど間を空けてから僕も教会の重い扉を開いた。そもそもこんな時間に教会の扉に鍵がかかっていないことが不思議なのだが。

礼拝堂を通り、奥の扉から子供達の部屋へ通じる廊下を歩いていく。礼拝が目的じゃなかったら、リプルちゃんはきっと子供達に会いにきたに違いない。

「……現した……」

「……こと……の！」

うん？すぐ近くから大声が聞こえる。

声の片方はリプルちゃんっぽいけど……。

僕はその声をたどりながら静かに部屋の場所を探った。

第10話　冷めたホットミルク　中編

教会の重い扉をゆっくりと閉めながらリプルはホッと息をついた。

（ありがと、神父様）

リプルは心の中で神父にお礼を言う。

今日の夜、子供達に会いたいからとあらかじめリプルが神父の了承を取っていたのだ。

リプルは暗い礼拝堂をソロソロと歩き、奥の扉から子供達の住まいに入る。

（あの子達の部屋はどこだったかな）

リプルはうるおばえで彼らが寝ている部屋を探す。角を曲がったすぐの部屋だということは覚えているのだが……。

（ここ、ここ）

リプルはまずは部屋につけたことに一安心。そして、一回深呼吸をしてからコンコンと扉をノックした。

反応はなかったが、神父様から話は聞いているはずなのでかまわず入る。

「やっぱり二人とも起きてたね」

「そりゃ、神父様から姉ちゃんが来るって聞いてたからな」

「ちゃんと起きているよ、ね？」

「だったら返事くらいしてよね」

「はいはい……」

一人はぶつきらばうに、もう一人は「ごめんね」と謝りながら微笑んだ。

「それで、何の用？」

「うん、お散歩に誘いに来たの」

リプルちゃんの言葉に二人の表情がクツと硬くなる。

「姉ちゃん、俺たちに喧嘩を売りにきたのか？」

「そんなつもりじゃないよ！ただね、だいぶ街の修復作業も進んで、

今ではすっかりちゃんと歩ける道になったんだよ。来る途中に何回か空を見上げたけど、お星様が綺麗だった」

「……………」

「今日はね、ホットミルクも作ってきたんだよ。あとはあ、ノエルちゃんからもらったあまゝいこんペーとう！」

リップルは嬉しそうに話しながら、二人の少年に見せる。

「お姉ちゃん、それはここで食べるわけには行かないの？」

「あ、ごめんね。まだ心の準備ができてなかった？そうだよ。いきなり誘っても行きづらいよね。じゃあまずはホットミルクで温まってからにしようか。夏とはいえ夜はけっこう冷えるもんねえ」

リップルはにこにこ笑いながら持ってきた出納からホットミルクを注ぐ。

「はい、熱いからフーフーしながら飲んでね」

「ふっざけんな！」

少年は差し延べられたリップルの手をはじく。

出納のカップが宙を舞い、中のホットミルクが床に流れる。

「ちよつと年上だからっていつも偉そうにしゃがって！俺たちを馬鹿にすんなよ！」

「レシオ、やめなつて」

もう一人の少年がリップルに食ってかかった少年、レシオを止めに入る。

「俺たちがどういう目にあつたのか姉ちゃんにわかんのかよ！俺たちのことを何もわかつてもないくせに偉そうに年上ぶんな！」

「べ、別に私はそんなつもりで言つたわけじゃ……」

「そんなつもりじゃなかったらどんなつもりなんだよ！俺たちのことをわかつてくれるのなら、神父様やセル兄ちゃんみたいに放つておいてくれればいいんだよ！こんなことをされるほうが余計に迷惑だ！」

「……」

「だいたい、そんなちんけな菓子とただ温めただけの牛乳で俺たち

の気を引こうつてのがお笑いだぜ。ここのチビどもじゃあるまいし
パン！

気がついたらリプルの右手はレシオの頬を赤く腫れるくらいに叩
いていた。

「へ、へへ…。よーやく本性現したかよ…」

「何てこと言うの！」

「！？」

予想外の大声と涙にレシオは思わずたじろいだ。

「一緒に暮らしてきた皆のこと悪く言うなんて、信じられないよ…
！」

リプルは止まらない涙をそのままに部屋を出ていった。

「うわ！？」

「ひゃう！？」

ちょうど角を曲がった辺りでリプルちゃんと激突した。

「せ、セシル君！？」

涙で赤くなった顔をしたリプルちゃんが悲鳴に似た声をあげる。

「あ、えつと……」

取り乱す暇もなく、僕達は教会の礼拝堂で落ち着いて話をするこ
とにした。

「どうしても、何とかしてあげたかったの」

リプルちゃんは、しゃくりあげながらだったが、僕に今までの経
緯を話してくれた。

「そうだったのか」

「でも、あんなことになって…。私、私はただ、皆でもう一度仲良
くお外で遊びたかっただけなのに！」

リプルちゃんの目にまた涙が溢れる。

「リプルちゃんはすごいよね」

「え？」

真つ赤な顔でリプルちゃんが僕を見上げる。

「レシオ君の言うとおり、僕や神父様だったら彼らのことを放っておいただろう。彼らを傷つけるのが怖いから。傷に塩を塗るって言う言葉があるけど、今の彼らにそんなことをしたら余計に塞ぎこんでしまうのがわかっていたから」

「じゃあ、私はいけないことをしたのかなあ……」

「うん、そういうことを言っているんじゃないよ。いずれにせよ、このままではいけないわけだし、いつかは荒治療に出ることも必要だったはずさ。遅かれ早かれね」

「……………」

「もう少し落ち着いてきたら、今度は僕も一緒に行こう。レシオ君たちだって本心からリプルちゃんのことを嫌ってはいないはずだよ。ただ、リプルちゃんが強引に連れ出そうとしたからたまに、ああなってしまっただけだから」

「そうかなあ……。レシオ君には以前にもお姉さんぶるなって言われたことがあるし……」

「それはきつとリプルちゃんのことが好きだからそう言ったんじゃないのかな？」

「私のことが好きだから？」

「よくあるじゃない。親が何でもかんでも子供にしてあげようとすると、子供が嫌がること。それとおんなじだよ。一種の照れ隠しみたいなものかな」

「照れ隠し……」

リプルちゃんは何を想像したのだろうか。小さな笑みをこぼした。

「さあ、行こう」

「うん！」

僕達は椅子から立ち上がり、再びレシオ君たちの部屋に行くために奥の扉を開けようとしたが、その前に太く鈍い音がして扉が開いた。

第10話　冷めたホットミルク　後編

「隠れて！」

僕は無理矢理リプルちゃんの頭を椅子の陰に押し込めた。

（いったいこんな時間に誰だ？）

僕は椅子の陰から教会に入ってきた二つの黒い影の動きを観察した。

「おい、どういうことだ？ 街も教会も学校もすっかり元通りじゃないか」

「ファトシュレーンの教師連中は動きが早いからな。材料さえあればパパッとなんでも魔法で作っちゃう」

「いろんな意味で俺達を超えている連中だよな」

「まったくだ。だが、いくら街は修復できても、こう度々襲撃されれば街の連中の心はズタズタになる。その隙にファトシュレーンを叩くぜ」

「だな。街の連中を人質にすれば、さすがの奴らも抵抗できなくなるだろう」

あいつら、いったい何を話しているんだ？

ファトシュレーンを叩くだって？

それってもしかして今までの襲撃は全部奴らによるものだったってことなのか？ だとしたら、ここで見過ごすわけには行かない。

ガタン！

僕はわざと椅子を揺らして音を出した。

「やべ、誰かいたぞ！」

「チッ、出直しだ！」

「待て！」

僕は椅子の陰から出ると、謎の二人組を追いかけた。

二人組の足は意外と速く、中央通りを抜けても速度を緩める気配がない。

（こつなつたら…）

街中での必要外の魔法使用は禁止されているけど、今はしょうがない。

「ライトニングアロー！！」

僕の指から発射された五本の雷の矢が謎の二人を追いかける。

「ぐあー！」

「いてえ！」

男達はそれぞれ悲鳴をあげながら前のめりに倒れる。

「そこまでだ」

僕は剣を抜き、その切っ先を謎の男達に突きつける。

「くっそう」

「その制服は……こいつ、ファトシュレーンの生徒か！？」

「そうだ！今までの襲撃は全てお前たちの仕業なのか！？」

「……………」

「答える！」

「ふふ、探偵ごっこはそこまでにしときな、坊や！」

「危ない、セシル君！」

ようやく追いついたリプルちゃんが後ろから叫ぶ。

「至近距離でのソードだ！かわしきれねえよ！」

男の手の中には既に炎でできた剣が収まっている。

「死んじまいな！」

「うわあ！」

確実に死んだ。

せっかく事件の糸口を掴んだと思ったのに、こんなところで死ぬなんて！

炎の剣が僕の体を腹から焼き尽くしていく――

「あ……れ？」

そつえばさつきから全然熱くないんだけど。

「セシルさん、大丈夫ですか？」

「え、エリスさん……！？」

僕の顔の上には心配そうなエリスさんの顔があった。

（いったい何がどうなったんだ？）

「まったく、世話の焼ける小僧じゃの」

「ドクター！？どうしてここに？」

「話は後じゃ。事件の糸口を逃がすでない！エリス、お前も小僧のサポートに回るのじゃ！」

「はい、ドクター！」

「く、くそ！」

「やすやすと捕まるかよお！」

予想通り、謎の男達は僕達に立ち向かってきた。

「くらいな！スパークバースト！」

男の片方が放ったのは一定距離進んだあと突然、^{バースト}爆発する形の魔法だ。

「エリスさん、そのタイプは一定距離進んだあとに突然爆発する。バックステップでかわすんだ！」

僕の忠告どおり、エリスさんは彼女の間合いまで近づいてきた電機が爆発するのをバックステップでよける。

「チイ！」

「これならどうだ。ロックニードル！」

ロックニードルは岩の粒子を針状にして打ち出す魔法。範囲は広いが上空なら射程範囲外だ！

「！？？」

「さつきはよくもやってくれたな。ゼロ距離でお返しだ！」

僕が唱えたのは相手を完全に麻痺させる魔法、スタンだ。ある一定以上の強さの敵には聞きにくいだが、こうして相手と完全密着して

いれば確実に効果が現れる。

「ぐあ！」

よし、一人倒した。

「てめえ、よくも！」

もう一人の男が杖を振り上げて反撃しようとする。

「後ろにはもつと注意したほうがいいですよ？」

エリスさんの拳がメリメリと音を立てながら男の背中にめり込んでいる。あえなく二人とも地面に倒れ伏した。

「エリスさん、ナイスバックアタック」

「えへへ、ほめられちゃいました」

エリスさんは可愛らしく微笑んだ。

「ドクター、この人達は……」

「うむ、おそらく外道魔術士じゃな。何でこんなところにおるんじや？」

「実は……」

僕とリプルちゃんは今までの経緯を話した。

「ファトシュレーンを叩く……か」

「どうしてそんなことを？」

「何かファトシュレーンに恨みでもあるのかもしれんのお。我が校も他の魔法学校と同じく優秀な生徒の裏にはこやつらのように何らかの恨みを持つて卒業した生徒もおるからのお」

「そんな悠長に構えていいんですか？」

「確信はないが、しばらくは大丈夫じゃろ。その間に教職員総出でこやつらのデータを割り出す」

ドクターエックスは持っていた杖を二人の男にかざした。刹那、男達の体が石のように固まってしまった。

「ドクター！？」

「麻痺が解けて逃げられると困るのな。こうして石にしておけば、まず自分達で解くことはできん」

「殺したわけじゃなかったんだ……」

「ばっかもん！それよりお前達は寮の門限を破ってこんなところで何をしておったのじゃ？」

「えっとお……」

「実は……」

僕達は教会での出来事をドクターとエリスさんに話した。

「ふむ、外に恐怖心を持った子供達か」

「私、早く元通りになるようにと思って……」

「事情はわかった。しかし、門限は門限じゃ。寮に帰ったら担当の先生にきつくお仕置きされることじゃな」

ああ、やつぱり……。

「エリスさんとドクターはどうしてこんな時間まで？」

「二人で森に設置した魔物の保管所の見回りに行ってたんです」

「これこれエリス、もっとマシな言い方はできるのか？せめて住まいと言え、住まいと」

魔物の住まい……ねえ。何かいまいちピンとこない。

「その帰りにセシルさんたちと会ったわけですよ」

「そうだったんだあ。お疲れ様！」

リップルちゃんが元気よくねぎらいの言葉をかける。

「わしらはこのまま学校に帰るがお前たちはどうするんじゃ？」

「……………」

「まあ、ここまでやってしもつたらどの道お仕置きは避けられん。

ならば、今のうちにその子供達の様子でも見てきてやるがよろう。きつと、リップルのことも心配しておるはずじゃ」

「え？」

「それじゃ失礼しますね」

エリスさんは丁寧に頭を下げて、ドクターと共に去っていった。

再び教会に戻ると、ドクターの言ったとおりレシオ君はリップルち

やんのことをずっと待っていたようだ。

起きてきた神父様に後押しされながら、無事に仲直りをする事ができた。

「では、せっかく仲直りもできたことですし、リプルさんの持ってきてくれたホットミルクを飲みましょうか」

「はい！」

「さんせい！」

魔法瓶の出納に入っていたため、中のホットミルクはリプルちゃんが見てから何時間もたっていたというのに温かった。

最終話／新たなる活路／前編

「なるほど、街で捕まえた外道魔術師ですか…」

「学校を叩くなどと大それたことを！返り討ちにしてくれる！」

「あれだけの魔物を呼び寄せる力を持っているのだ。油断はできませんぞ」

「それで例の二人は今どこに？」

憤る男性教師をよそに、一人が聞く。

「ワシのところで保護しておる。石化に加え、特殊拘束具もつけおるから、まず自力脱出はできません」

「それなら安心ですね」

「それよりどうします？本来の予定なら明日から学校は再開の予定でしたが…」

「うゝむ、こんな奴らが野放しになっている状態での再開はいささか危険を伴うか…」

「いや、やはり学校は再開したほうがよいかと。敵の正体がわかりかけてきたのですから、その対策をすべきです！」

「そうはいつでもこの二週間後にはもう夏休みではないか。ここはこのまま少し長めの夏休みとして生徒を安全な故郷に返してはいかがいです？」

「それも一つの手なんですよねえ」

「我々で出したボロは我々で処理する、か？確かに今まででもそうしてきたが…」

「ええ…」

教師達の目にはとある生徒達の顔が浮かぶ。

「今回は彼らが介入してしまっている」

「当然、彼らは我らに協力すると言い出すでしょう。もちろん、生徒会の生徒達も」

「これがありきたりの相手ならよかったがのぉ…」

「今回は相手が悪すぎます。正体がつかめたといってもまだ糸口だから敵の勢力全体がわかっていません」

「一緒に戦うには厳しすぎるな……」

「万が一、彼らの命を散らす結果になっては元も子もありませんからね」

「どうしたものか……」

最終話　新たな活路　後編

早朝、僕の元に一件の念話が届いた。

『皆のもの、早朝特訓はワシの事情で中止とする』

ドクターエックスの声で、特訓の中止連絡だった。

（困ったなあ…）

僕は窓から朝日を見ながら頭を掻いた。実はもう一時間も前から起きていて、いまさらベッドに入っても眠くならないのだ。とはいうものの、朝食まではあと一時間以上ある。

（少し掲示板でも見に行くか）

こんな朝早くから更新はされていないだろうと思いつつも、やることがないので僕は寮の階段を下りて掲示板を見に向かった。

まだ朝も早いし掲示板には誰もいないだろうと思っていたのだが、いざ来てみると少し人だかりができていた。

いつものこの時間は掲示板なんて見に来ている生徒はほとんどいないのに珍しいこともあるものだ。

そんなに貴重な掲示でもしてあるのかと思いつながら、僕も掲示板をのぞいてみる。

「！！」

掲示板の中央にはでかでかと魔法文字で『明日より、学校再開！』と書かれていた。

「あ、セシル！」

僕を後ろから呼ぶのはマリノちゃんとノエルちゃんだった。ノエルちゃん、もしかして今日もマリノちゃんの部屋に泊まっていたのかな。

「見たんだ、その掲示」

「驚いたね。明日から学校再開だなんて。確かに例年通りだったら今日からテスト一週間前に入るけど…」

ノエルちゃんの言葉で思い出す。そういえば、来週からはテスト

期間になるのだ。

「いいよねえ、セシルは。大魔導士の昇級試験は……」

マリノちゃんは言いかけてハッと口を押さえる。

「いいんだよ。多分、次の昇級試験も見送る羽目になりそうだし……」

僕は特に気にすることなく笑った。

大魔導士から賢者への認定試験は毎年二回、この地方では聖王都バレルで行われる。しかし、僕はその第一回目の六月の試験をパスしていたのだ。半分は魔獣達の侵攻のことが気になっていたというものもあるが、そもそも僕は賢者に昇格するためのもう一つの資格である高等魔術の習得をクリアしていないからバレルに行っても仕方ないのだが。

「それよりマリノちゃんは大丈夫なの？ノエルちゃんとはかくとして」

「なあによ、その『ノエルちゃんとはかく』てえのは」

「だって、いつも勢いはいいんだけど、消沈するのが早いんだもの」

「う、うるさいわねえ！今回は本気なんだからね！見てなさいよ、飛び級のアンタなんかに負けないんだからね！」

一人、勝手に燃え上がるマリノちゃん。

ほんと、この勢いがテストの日まで続けば問題ないんだけどなあ。

「そっか、いよいよ学校が再開か……」

その日の昼下がり、僕はいつものメンバーとすっかり修復された談話教室の一角で学校再会の話をしていた。

「まあ、校内テストがない俺たちにはあまり関係がないけどな」

「ウェスリー、他人事みたいに軽く片付けないでよ」

そう言うマリノちゃんの手には今朝の段階では見られなかった参考書が握られていた。

「くそう、ダイゴ殿め。あやつはこのことを知っていたから我輩の

賭けに考えなしに乗ったのか…」

つまり、そういうことなんだろうな。普通だったら、絶対そんな賭けにのる人なんていない。

「リプルちゃんはテスト大丈夫？」

「うーん、自信はないけど頑張るよ！」

リプルちゃんはいつでも健気で元気いっぱいだ。

「やあ、そこにいたのか」

「こんにちは皆さん」

僕達のテーブルにやってきたのは寮長さんとラウナちゃんだ。

「ここ、いいかい？」

「はい、どうぞ」

ノエルちゃんは小さく頷き席をつめる。

「学校再開……君たちはどう思う？」

「どうって…ねえ？」

昨日のことを知らないマリノちゃんとノエルちゃんは質問の意味がわからず首を傾げる。

「多分、先生達も苦渋の選択だったとは思いますが」

少し考え、言った。

「それはわかってているが、今この段階でまた奴らに攻め込まれたらどうする気なんだ？それこそ、テストどころではなくなる。街そのものが危なくなるぞ」

「先生達がこういう話し合いを経て、学校再開を決定したのかはわかりません。ですが、今のところはまだ大丈夫だと思います」

「そんな楽観的な。セシルさんとリプルちゃんは昨日、例の外道魔術士達と対立したんでしょう？どうして先生達に意義を申し立てに行かなかったんですか？」

「いくら君達が生徒という立場だとしても関わってしまったのだから、先生達も意見を聞く耳くらいはもっていたはずだぞ？」

「そうかもしれない。でも、意見をしたところで絶対に跳ね返してくると思うの」

「どうしてそう思う？」

「昨夜、外道魔術師を捕まえたときのドクターエックスの顔、あれは明らかに何かを知っていた顔でした。彼らをすぐファトシュレーンの生徒だと断定していましたし」

「！？」

「ファトシュレーンの卒業生だったのか！？」

「僕の勘ではそうだと思います。ドクターエックスもあの二人のデータを割り出すと言っていましたから」

「何てことだ…。ファトシュレーンは優秀な生徒ばかりじゃなかったのか？卒業生は皆、偉大な賢者だと聞いて入学したのに…」

「そんな学校など、誰も興味を持たないよ」

新たにやってきたのはグラッツ先生だ。

「どんなきれいな学校にも汚い部分はあるものさ。ファトシュレーンもまた例外ではなかった」

「グラッツ先生……貴方もその一人だったというじゃありませんか？」

「！？」

寮長さんの怒りを含んだ声に僕たち全員が驚愕する。

「今はその話はいいだろ。その話がしたければ個人的に部屋に来な、アキト」

「……………」

「それより学校再開についてだが、あまり細かいことは気にせず、いつもどおりに過ごすようにしてくれ」

「グラッツ先生、あの二人の身元はわかったんですか？」

「いや、まだだ。何しろ卒業生全てのデータをひっくり返している最中だからな。もうしばらく時間がかかりそうだ」

「そうですか…」

「そんな辛気臭い顔するなよ。お前たちは今までどおり学校生活を楽しんでくれたらそれでいい」

グラッツ先生はそう言ってニヤリと笑った。

「それにな、もう少ししたら頼もしい援軍がこの街にやってきてくれるだろう」

『援軍！？』

驚く僕たちにグラッツ先生は自信満々に頷いた。

「ああ！さあ、いよいよ本番だ。あの二人組のデータを割り出して、敵の懷を一気に叩いてやるぜ！」

やけに自信満々のグラッツ先生だが、いったいどんな援軍を頼んでいるのだろうか。

今後僕達にどのような波乱が待ち受けているのだろうか。

マリノちゃんたちのテストはどうなってしまうのだろうか。

ゆっくりと動いていた時計の針が、急激に速度を上げて動くようになっていた。

END

あとがきーと2ー

こんにちは新城寺です。（またまたあとがきを勝手に書いてしまいました）

本格派魔法学園ファトシュレーンーぱーと2ーはいかがだったでしょうか？

今回はぱーと1から謎の事件と呼ばれていた事件の真相が少しだけ明らかになりました。しかし、その分新たな強敵の登場にセシル達は、そしてレアードの街は深い傷を負ってしまいました。街の形は直せても人々の心が治る日はくるのでしょうか。そして、セシル達の進むべき道は……。次回作、乞うご期待！！

さて、今回のぱーと2ですが話数が大幅に伸びてしまいました。これを書いていた当初はぱーと1と同じく10話構成でいこうと考えていたんですが、どうにもこうにも書き綴りたい話を全部盛り込んだらあつという間に10話を越えてしまいました。ちゃんとした枠の中に物語を入れるのも小説家として大事なところですからね。気をつけていきたいと思います。

今回は新しい敵キャラの登場もあってか、全体的に闘いをメインとした話が多くなってしまったり、重い感じになってしまいました。次回作は闘いをメインにした話はほとんどないと思います。（構想段階の中では）

次回のテーマはやはり『期末テストと夏休み』です。なんだかんだで学校が再開してしまつてテストを受けなくてはなくなつてしまったので、セシルパーティーの面々を大わらわです。皆、果たして昇級できるのでしょうか。

作者も皆が頑張つて降級しないように最善を尽くします。だから頑張つていい子にしていってね（この鬼作者め）

それではまた次回でお会いできますことを祈っております。

～登場人物紹介～

さてさて、次は恒例の登場人物紹介に移りたいと思います。

～主人公パーティー～

セシル・マトレウス（16歳）大魔導士
168cm
2月14日生まれ

本編の主人公。典型的なお人好しで困っている人を放っておけない性格。賢者になるためには豊富な魔法力が必要だということを思い知らされ、ドクターエックスの実験に協力しながら魔法力増強の特訓を開始することになった。長い寮生活&貧乏生活を送っているためか商品の値段にうるさめ。

得意属性：雷

アロー

得意形状：矢系

マリノ・オルスカーナ（16歳）上級魔術士5級
159cm
1月29日生まれ

セシルと同期でファトシユターンに入学した明朗活発、健康優良少女。明るくさばさばとした性格は男女共に受けがいい。幼い頃に故郷の村で大道芸を見て自身もそうなりたいと願い、大道芸人のヴィクターという人物に志願しようとするが、彼は「ファトシユレーン魔法学校を卒業したら弟子にする」という約束を残してマリノの前から去っていった。そしてマリノはその約束を果たしてもらったため

にファトシュレーンで修練を重ねている。

得意属性：浮遊・補助（初歩）

得意形状：?????

ノエル・ハミルトン（16歳） 上級魔術士4級 9月19日生まれ
154cm

マリノの友人で、学校には実家から通っているがどちらかというとマリノの部屋（マリノはファトシュレーンの寮住まい）で寝泊りすることが多い。決して不良というわけではないのだが、仕事以外ではあまり家に帰らない。ちなみに実家は洋菓子を中心とした銘菓店だが、売れ行きは良くなかったが、今回の事件に乗じてお店の人氣アップを狙っている！？内気で大人しく、一步控えめなメガネっ娘。

得意属性：火

得意形状：球系^{ボール}

フレッド・バスター（26歳） 7月3日生まれ
180cm

ファトシュターン魔法学校の若き警備員。魔法学校の警備員だが、聖王都バレルから派遣された兵士のため魔法は使えない。魔法学校の良き兄貴分として生徒達（特に女子生徒）に慕われている。性格は真面目だがたまに予期せぬ大ボケをかますこともある。今回一ツ歳をとりました。

リプル・エルバーム（13歳）高等魔術士7級
1月1日生まれ
139cm

魔物に囲まれていたところをセシル達に助けられた女の子。セシルと同じく飛び級をしていてセシルの一つ下、マリノ達の一つ上の階級に所属している。ちなみに魔法の世界に入ってからまだ一年半ほどしか経っていない。幼いリプルがここまで頑張るのは医師である父親を手伝いたいという理由から。いつも素直で明るい完全な幼児体型（13だから当然か？）の炉利っ娘である。

得意属性：回復・水

得意形状：????

ギルバート・セルバティス（21歳）初級魔術士8級
12月5日生まれ
184cm

遠く離れた大陸の戦士養成学校から特別任務として命じられてファトシュレーンにやってきた軍人肌の男。ファトシュレーンにやってきた当初は色々と問題を起こしたが、一ヶ月経った今は馴染めているとは言いがたいものの他人に迷惑をかけるような行動は自粛するようになつてきた。編入生の為、追い回し期間は省かれている。

得意属性：????

得意形状：????

エリス・ラムレーズン（18歳）中級魔術士1級
8月11日生まれ
156cm

今作初登場の購買部のお姉さん。まめでいつも一生懸命なのだが、ドジでトロイのが玉に瑕。ドワーフと人間のハーフで、華奢な体ながら怪力である。

ウェスリー・バロンウッド（17歳） 大魔導士 5月20日生まれ 169cm

エリスと同じく今作から登場するセシルのクラスメート。ファトシユレーンには11歳のときから入学している。特にといった特徴がなく、メンバーに突っ込みを入れたがる。

得意属性：氷

得意形状：?????

生徒会員たち

アキト・コーラル（17歳）高等魔術士2級 2月17日生まれ 172cm

ファトシュレーン男子寮の寮長を任されていると同時に生徒会生活指導役員でもある。典型的な地味めの眼鏡君だが、嫌味なタイプではなくセシルに関しては厳しくも優しい兄的な存在。

ラウナ・クロスヤード（15歳）中級魔術師6級 6月20日生まれ 160cm

ファトシュレーン魔法学校生徒会役員で新たに書記に任命された少女。魔術師としての力量はまだまだが、はるか東の文化に興味を

持っており茶道や弓術などが得意。セシルとは中級クラスの臨時講義時に知り合った。素直でやんわりとした雰囲気を持っている。刀の扱いに長けており、男に混じって先陣を切る。

コーネリア・F・フロラント（18歳） 賢者 166
cm

ファトシュレーンの生徒会長を務めている。姿の確認こそなかったものの何気に前作第2話から登場している。セシルのことをとても気にかけていて、姉のように尽くそうとする富豪のお嬢様。性格はおっとりのおんびりしている。

（教職員やその他の人達）
グラッツ・ロッソ（26歳） 176
cm

マリノとノエルのクラス担任で元セシルのクラス担任。実はファトシュターン魔法学校の卒業生で、二年前に教師の資格を得てここに戻ってきた新任教師。まだ若いためか非常に生徒想いで人気が高い。ファトシュレーン在学時はいろいろと問題を抱えていたらしい。魔法使いの学校にふさわしくない斧を使った戦術を得意とする。過去にいろいろと問題を抱えていたらしい。

Dr・エックス（61歳） 15
2cm

ファトシュトレーン魔法学校の変り種。一応、魔法科学を専門としているのだが、彼には魔物研究という恐ろしい趣味があった。謎の

魔物増殖事件が起こったせいで彼の中を流れていた血がついに騒ぎ出し、生徒の訓練用にと魔物を捕獲するようになる。現在は機械兵器なども作っているらしく、さらにはレアードの周りの森や洞窟に新たなコロシウムを建設中らしい。街の復興などに一番力を注いでいるのも彼だったりする。

セリカ・ウィルハート（23歳）

157

cm

グラッツより少し前にファトシュレーンの教師として就任したファトシュレーン出身の女性。どちらかというところか抜けた印象がある。常に笑顔で、口調も優しく丁寧。

過去のグラッツのことも幾分知っているようだが……。

ダイゴ先生

男子寮の主こと最高責任者。普段は保健体育・模擬実戦科目を担当している。

ロバート・オーウェン

セシルのクラス担任。

ルイス・キャロッツ

別の大陸の騎士養成員から派遣された女性。非常に厳しいが、これからセシル達とどうからむのだろうか……

神父様（クレス・ウエルマート：）

4月29日

生まれ

175cm

レアードの街にある教会の神父。いかなる人々にも平等に接し、いつも笑顔を絶やさないセシルと一緒に孤児達に読み書きを教えている。お茶好き。戦いのときに冒険者用の護身ロッドを使っているため神父の職に就く前は冒険者をやっていた可能性もある？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9595b/>

本格派魔法学園！！ファトシュレーン～ぱーと2～

2010年10月8日14時46分発行